

愛・ロボット

永野課長の無断欠勤

今は西暦 2040 年。

この時代の特徴としては、女性の社会進出が進んだことだ。

いまやほとんどの業種では男性も女性も同数が働き、重要なポストも男女が同数占めている。日本の首相もここ何代か女性が務めているくらいだ。

この女性の社会進出を支えているのがロボットの発達であり、今や全世界ほとんどの家庭に家事ロボットが入り、家事を任せることが出来るので、女性も安心して仕事に打ち込むことができるのだ。

僕の名は大沢達哉。この家庭用を中心に産業用や警察用等あらゆる種類のロボットを製造する会社に勤めている。

僕の務める会社は家庭用ロボットでは、世界最大のシェアを持っていて、OEMも含めて70%以上のシェアを有する。これまでに出荷したロボットの数は世界中で4億台を超えているはずだ。

幸運にもこの世界最大の会社に就職することは出来たが、威張れるような事は無い。

全世界で何万人かいる技術者の中の、数千人かいるソフトウェアエンジニアの中のしがな一人に過ぎない。入社して何年にもなるが、未だに平社員のままで主任任用の話も無い。

「おい、永野課長は今日も休みかな？」

仲間のエンジニアの会話が聞こえて来た。

永野課長とは僕の属する、家庭用ロボットのOS—即ち基本ソフトを開発している課の課長である。

まだ三十代前半の女性課長であるが、バリバリの仕事人間であり、積極的な仕事の進め方と、容赦の無い課員への指揮で“鉄の女”と陰で噂されている女性である。

「今日で4日になるが、連絡がちっとも入らないな。誰か聞いているか？」

課長決裁が滞って困っている同僚が周囲に声をかけるが、誰も知らないと肩をすくめるだ

けだ。

すっかり困惑する同僚の困った顔を横目で見ながら、僕は内心でニヤッと笑った。

なぜ課長が無断欠勤を続けているのか僕は知っているーと、言うより無断欠勤の原因を作ったのは僕なのだ！

永野課長が新製品ロボットの試験と称して、開発中のロボットを自宅に持ち帰っていることは以前から知っていた。

そこで面白半分を持ち帰るロボットに密かに記録装置を取り付けて、鉄の女が家でどんな生活をしているのか覗き見てみようと思ったのがそもそもの始まりだった。

そして返却されたロボットから得られた結果は驚くべきものであった！

なんとあの女は家に持ち帰ったロボットを自分の性欲処理に使用していたのだ！

B e b b e r (ベベル) シリーズのブランド名で知られる当社のロボットは家事ロボットであり、表向きは性の相手には出来ないと発表されているが、実は性行為に対してインターロックが掛けられているだけあり、幾つかの回路をジャンパーして、秘密のパスワードを入力するだけで、この性インターロックをオーバーライド出来るのだ。

無論永野課長も開発に関わっている一人であるから、この解除方法は知っており、家事用ロボットを自慰の道具にして、自宅で密かに性的欲望を晴らしていたのだった。

会社で男性社員に対して高圧的態度を取れるのも、自宅で肉体的欲求を晴らしているため、男性に性的欲求を求めているのが理由なのだろう。

そこで、一計を案じ、近日発売予定の最新型ロボットに、私が作った OS をロードしておいたのだった。

この近日発売予定のロボットには、革命的と言えるほど革新的な OS が搭載されて発売されることになっているが、私の作った OS は、この革新的 OS を基にして一部書き換えた物である。

案の定、永野課長は何も知らず、ロボット達とのセックスを期待して、いそいそと、私の作った OS を搭載した 3 台の試作ロボットを家に持ち帰って行った。

そして今頃は、ロボット達に雌奴隷として調教！ーされているのが、無断欠勤の本当の理由なのだった！

ちょっと今の様子を見て見ようか・・・、

僕はヘッドセットを被ってテレメトリーのスイッチをオンにした。

『アアー、もう止めて・・・。』

ヘッドホンから艶かしい声が聞こえて来た。

そしてロボットの目を通した画像が目の前のモニターに現れた。

三台のロボットが取り囲む前で、犬の様に四つんばいにさせられた課長がロボットに背後から突き立てられ、正面に位置するもう一台のロボットの股間に取り付けられた物を無理やりしゃぶらされているのだった。

もともとバックから犯している一物も口内にふくまされている一物も課長が自分のために設計して作った物だから、自分の快感のツボを得ているのだろう。

今日で土日を挟み一週間近く、ほとんど休む間も与えられず、日夜責め立てられているのだった。

さすがにロボットは疲れを知らず、飽くことなく課長を責め続けているが、課長の方は、連日の責めの前に、何日も前から既に意識朦朧という状態であった。

私の作った OS とは、生意気な女を従順な女奴隷に調教するための基本ソフトだったのだ!!。

『そうだ、もっと唾液を一杯ふくませ裏筋を真心をこめてなめるのだ!』

抑揚の無い合成された男性の声を模した音声で口中を犯しているロボットが課長に冷たく命令した。

『調教の甲斐あってなかなか締め付けられるようになった来たじゃないか。』

後ろから犯しているロボットが激しくピストン運動を繰り返しながら無機的な合成音を発した。

ロボットが人間の肉穴を犯してどんな快感を得ているのか判らないが・・・恐らく快感とは無縁の単なる一物に埋め込まれたセンサーからのシグナルを拾って、CPUで演算処理して条件判断しているだけであるはずであるが、ロボット達は導入された基本ソフトに従い忠実に処理を進めていた。

『こんどはこちらの穴を開発してやろうか?』

犬の様に背後から犯しながらロボットが、すぐ上の穴に指をすりと入れたので、ロボットの股間の物を咥えながらビクッと体を震わせた。

ロボットの調教の合間に、私も何度か課長を抱いたことがあるが、最初の頃はただの肉の筒と言う程度の面白みの無い体であったが、ロボットの調教を受けている間に、その周

りの筋肉が鍛えられ、肉洞の周囲の筋肉を駆使して私の物を締め付け、尽きることのない快感をもたらす名器に改造されていた。

この調子なら 2~3 日後には絶妙なアヌスを楽しめそうだ・・・チビでデブで醜男で人からはコンピュータお宅と見られている僕には、これまでの人生でろくに若い女性と話をした記憶も無い。

僕も健康な若い男だから人並みの性欲はあるが、女性と親しく付き合い肉体関係を持つ事など夢のまた夢で、何時もコンピュータの作り出す仮想現実の女性で性欲を解消するしか無かった。

しかし、ロボットに調教された永野課長を抱くことが出来るようになって、そんな僕のつまらない人生も一変した。

今は少しでも早く一日の仕事を終えて、永野課長の部屋に直行して、汲めども尽きぬ絶妙の熟れた女体に自分の男を突き立て、肉欲を満足させたいと思う毎日である。

いっそのこと責任を取って永野課長と結婚しても良いと思った。

昼夜を分かたずロボットの調教を受け、すっかりセックス中毒に陥り、人間としては完全に壊れてしまっているが、すっかり開発された肉の道具を装備したセックス人形と化した今となつては、性欲の処理専用にするには丁度良いだろう・・・と、あれこれ空想を巡らせると、また股間が疼いてくるのを感じるのだった。

オット！誰か来た！一人が近づく気配を感じて僕は、慌ててモニターを通常の仕事画面に切り替えた。

鳴海室長の訪問

「おい、鳴海室長がお前のことを探していたぞ。」

新製品開発のための打ち合わせで他部署から帰って来た僕に同僚が声を掛けた。

「鳴海室長？聞いたことの無い名前だな。」

何しろ何万人もの従業員を雇用する大企業であるから同じ社内に努める従業員と言っても一面識も無い人は無数にいる。

「社長室の鳴海だと言っていたぞ。戻ったら電話するようにとメモをおいていったぞ。」

と、メモ紙を僕に手渡した。

当社には社長秘書や社長のブレーンを統括した社長室と言う部署があることは以前から知ってはいたが、僕に取っては雲の上にいるような人たちであり、全然関心を持ったことは無かった。

社内電話帳で検索すると、確かに鳴海と言う人物が社長室の室長をやっているようであり、メモに記された内線電話番号と一致している。

一体全体、平社員の僕に何の用事だろうと訝りながらダイヤルした。

ダイヤルの番号には、最初アシスタントの女性が出て、直ぐに鳴海室長に取り次いでくれた。

「やあ、大沢君か？最初から君の都合を確認して合いに行けば良かったんだが、失礼したね。」

電話口から太い声が帰って来た。一声の感じから、ずんぐり中年太りした40過ぎの男を想像した。

「所で、君とちょっと話をしたいんだが、来てくれるかね？」

有無を言わさぬ調子で重役室のフロアに在る会議室に来るように言われた。

重役室フロアはビルの高層階に在り、低層階の技術部門に勤める僕には、入社以来この様な高い所に来たのは初めてであった。

僕たちが居る事務室と比べ天井も高く、内装にも贅沢に金が掛けられていることが理解出来た。床も厚い絨毯が敷き詰められていた。

重役フロアの入口に在る受付に鳴海室長から呼ばれてここに来たことを告げると、くだんの会議室まで案内された。

さすがに偉い人に面会に来る人に対する受付の態度は丁重であった。

一介の平社員に過ぎない僕にもそんな恭しい態度を取られると、何やら背中が痒くなってくるような気がした。

通された会議室は、ごく少人数での打ち合わせに使用する恐らく一番小さな会議室なのだろう。小さいと言っても僕が働いている部署なら4~5名分の机は楽に置けそうな面積はあるし、豪華なソファと高級そうな木のテーブルなどの調度があり、壁には端整な額に納められた値の張りそうな絵が掛けられていた。

窓からの眺めも素晴らしかった。

所在なげに室内を眺め回している間に、鳴海室長が自らやって来た。

「やあ、急に呼び立てて失礼したね。」

と言って、右手を挿しだし握手を求めてきた。

鳴海室長は私の想像していた通りののでっぷりした男であった。

ウェスト周りは1メートル以上はあろうかという肥満腹で、額は後退して薄い髪の下に透けて見える頭皮はテカテカと油光りしていた。

ぎろつとした目と大きな口からは、いかにも生命力が強そうな印象を受けた。

僕には何故か鳴海室長の体躯に巨大な爬虫類かあるいは恐竜のようなものを連想した。

グッと差し出した毛深い太い手は、この男の男性ホルモンの強さのようなものを感じさせた。

強い力で手を握り締め強引な握手を済ますと、ソファに座るよう促した。

「やあ、君のことは社長室にも聞こえて来ていてね、基本ソフトの開発部隊に優秀な若い社員がいると聞いて、前々から一度会って仕事の話を聞きたいと思っていたんだよ・・・」
僕は子供の頃から、齒の浮くようなお世辞を言うような人間には、ろくな人間はいないから気を付けるよう、親から言われて育って来たので、この目の前の僕を褒めそやす男に不快感を抱いて、口車には乗るまいと、そっと心の中で身構えるのだった。

「・・・社長室とは社長の身の周りの色々な業務をする所でね、重要な業務の一つに会社の内外の色々な情報を集めて来て、私の方で情報を整理して取捨選択し、社長に報告するというような業務が在る。君たちは多分気が付いていないと思うが、君たちの周りの色々な情報もけっこう聞こえて来るんだよ。」

と、ここまで喋ると、ニヤッと口を歪ませ僕に視線を向けたので、思わず背中がゾクッと震えた。

「所で、君は今日仕事を終わった後、時間を取れないかね？ 社内じゃなくて、何処か別の所でゆっくり話をしたいのだが・・・」

僕としては、特に公式な予定が有る訳ではないが、最近益々従順な雌奴隷と化して来た永野課長の熟れた体を抱きたくて今日も会社を定時に終わったら飛んで帰ろうと思っていたのだが、何か情報を掴んでいる風な鳴海室長を前にして、どのように答えて良いものかと思案していると一

「君が今日も定時で帰りたい気持ちは良く分かる。しかし永野課長の件と言えば君も断ることは出来ないのではないかね？」

と、こちらの気持ちを見透かすようにギロツとした目で迫って来た。

この男は永野課長の事件を知っている！私は途端に青ざめ落ち着きを失った。

「今晚6時に銀座の蘭風亭と言うレストランに予約を入れておくから、必ず来てくれるね？そこは我が社で重要な商談などに使うレストランで落ち着いた雰囲気です話しが出来るから・・・」と、呆然とする僕に勝ち誇ったように言うと、レストランの地図を手渡してそのまま部屋を出て行ってしまった。

その後、僕はどのように自分のデスクに戻ったのかも記憶に無い。

鳴海室長の居竦ませるような目がずっと脳裏から離れなかった。

思えば、後先を考えない軽はずみなことをしてしまったものだ。

これはれっきとした犯罪ではないか。

僕は折角入社出来たこの会社を首になり、警察に捕まり裁判に掛けられ刑務所に入れられるのだろう。

その後の僕の人生はどうなるのだろう？

今の日本では失業率は20%近い。犯罪で会社を首になったら二度と就職出来ないだろう。しかし鳴海室長がその場で解雇を告げず、レストランに来るようにと言ったのはどういう意味だろう？

手の中に握り締められていた鳴海室長から手渡された地図に恐る恐る目をやった。

会社に警察を呼ぶと世間的にまずいので、指定のレストランに警察を待機させておいて、来た所を逮捕させるつもりなのか？

それともこのようなスキャンダルが世間に知れると会社の信用に関わるから、内々に処分しようとするつもりなのか？

死刑囚には最後に豪華な食事を与えるというのがそのつもりなのか？

色々と悲惨な考えが次々と頭の中を駆け巡り、自分のコンピュータの前にも、全く仕事に集中することが出来なかった。

そして上の空でコンピュータを操作している内に操作を誤り、僕の作った調教ソフトが流出を始め、明日発表予定の基本ソフトを上書きしていることに、その時僕は気が付かなかった・・・

そのレストランは銀座の裏通りに在った。

銀座と言っても繁華街を外れており、華やいだ明るい雰囲気は無く、人通りもそれほど多

くない。

レストランの周囲は南欧風の高い塀に囲まれており、中の様子は通りから窺うことが出来ない。

厚い木のドアに民家の表札のような小さなプレートが掛けられているだけで、そこに蘭風亭と記されていたので、そこが目的のレストランであることは間違いないことが判ったが、事前の知識が無ければ、そこにレストランが在ることさえ気が付かない人の方が多いだろう。

インターフォンを押して本日の予約者であることを告げると、重いドアが開き中から黒いタキシード姿の給仕が現れ中に招き入れた。

塀の中は小さな庭になっていて植え込みが在った。庭に面してガラス窓の幾つかの部屋が在ることは窺えたが、植え込みに巧みに遮られて中の様子を窺うことは出来ないようになっていた。

建物の中に入るとそのまま個室に案内された。

部屋の中に入ると、なるほどこの部屋なら中のプライバシーが守られそうだった。

「お連れのお客様は少し遅れるので、先に食事を始めていて欲しいと伝言がありました」タキシード姿の給仕が告げた。

「本日のお食事に関しては、お連れ様から既に承っておりますが、何かお気に召さない物がありましたら、お好みの物に変更することも出来ますが・・・」と、メニューを渡された。メニューを開いて見たが、フランス語か何か訳の分からない横文字が並んでいたの、ボタンと閉じて特に在りませんとだけ言った。

給仕が立ち去った後も僕の不安と混乱は益々増すばかりだった。

給仕の持って来た、良く冷やされた食前酒のグラスを、もうヤケクソだ！ どうにでもなれ！とばかりに一気に飲み干した。

食前酒の強いアルコールが、すっかり乾き切った口中にヒリヒリと刺激を与えた。

「パンジーをもじってパンティーとは、笑わせるじゃないか?! いやー！ 愉快愉快！」と、すっかり酒が回った鳴海室長が大声で笑いながら、その大きな手で僕の肩を力一杯何度もバンバンと叩いた。

「はい、我が社では OS の開発コードには、何故か花の名前を付けることになっています。

現在市販中の OS-9（オーエス・ナイン）はコスモス、そして明日発表予定の最新基本ソフトである OS-X（オーエス・テン）の社内開発コードは、パンジーと呼ばれています。」

ここまでの間に、既に二人で何本ものワインを空けていた。

どうやら鳴海室長は、ここで僕を逮捕させるつもりは、無いようだとなると、急に心が軽くなり一機に酔いが回って口が軽くなっていた。

「この OS-X は、世界で最初の完全自立型の基本ソフトです。従来のロボットに搭載されていた基本ソフトは、主人から命令されて初めて動く受動的ソフトでした。・・・例えば主人が食事を作れと命令すれば初めて動き出し、メモリーに内蔵された料理のアプリケーションソフトを呼び出して料理を始める・・・と言うような状態でした。従って主人から何も命令を受けなければただボーと突っ立っているだけでした。この OS-X は、完全能動型のソフトであり、ロボット自らが内蔵された五感のセンサーからの情報に基付き、今何をすれば主人から喜ばれるかを自分で考え自分で判断し自分で行動出来るソフトです。

例えば部屋が汚れていると感じれば、命令されなくても掃除をしたり、主人が帰って来る時間に合わせて部屋の空調を入れたり、主人のお腹が空腹になる前に食事の準備をしておいたり・・・等々と従来より格段に進歩した基本ソフトなのです。」

ここまで話すと、また室長から注がれたワインを一口で飲み干した。

「ここまで完全に出来ていた基本ソフトなので改造は簡単でした。・・・ロボットは、生意気な女を発見すると自分で考えて行動を始め、その女を従順な女奴隷に調教します。・・・ここで特定の女性のデータを入力しておく、その女性だけを調教することになります。セックスインターロックのオーバーライドはハードウェア上の面倒な手順抜きでソフト上から出来る方法を発見しました・・・」

「君は簡単だったと言うけれど、君のその優れた才能が在ったればこそだろう。永野課長も君のその才能に嫉妬していたのかも知れないな？・・・君に対して厳しく当たっていたのもそのせいかも知れない。」

鳴海室長が何かを思い出しているかのように、独り言のように話しを続けた。

「永野課長、あの女はもうだめかも知れないな・・・すっかりセックス中毒に成っていたよ。僕が様子を見に彼女の家を訪ねていったら、玄関を開けるなり、素っ裸でいきなりむしゃぶり付いて来て、僕のズボンのチャックを下ろして私の物を咥えようとしたよ。そして、もっと驚いたのは、あの女の口技の上手さだよ！突然の事で動転していた僕のモノを口に含んだと思ったら、流石の僕もあっという間に追い立てられ、たまらず口の中に発射

してしまったよ！」

と、その時の情景を思い出しているかのように顔を紅潮させて興奮した声を上げた。

「そして、僕の放出したものを美味しそうに喉を鳴らして飲み込んでいったよ！」

と、酔いの回った顔で大笑いしながら捲し立てた。

「・・・ロボット達の調教が余程上手かったのか、プロでもあんな技術を持った女は、早々居るもんじゃない！最早あの女の理性は完全に喪失して、ただセックスの事だけが、頭の中を占めているようだった・・・」

ここでワインを一口含むと何か真剣な目で僕の眼を覗き込むように見つめて来た。

「鉄の女と呼ばれていた永野課長もここまで調教出来るのだ。もう一人の鉄の女も我々の良いように調教出来るのではないかね？」

もう一人の鉄の女とは？ー 僕はピンと来た。当社の社長だ！！ 最先端の製造技術でグループ全体のロボット開発の中核を占める日本支社にアメリカ本社から単身乗り込み、日本に住み着いたまま世界全体のグループ会社の指揮を執っている辣腕社長。

まだ40歳前で社長に就任して、その後10年足らずで、世界最大のロボット会社に育て上げた天才的手腕を持った社長。

鳴海室長は社長の側近に在りながら、社長を奴隷にして自分の意のままに操ろうとしているのか？

僕は集会で社員を前にして会社の方針を演説する社長の姿を思い出していた。

あのウェーブのかかったブロンドの長い髪、彫りの深い知性的な顔、透き通るような白い肌、40半ば過ぎと思えない均整の取れたプロポーション・・・、一つ一つ思い出していると、自分は何かとんでも無い大それた事に巻き込まれそうな恐怖心を感じたが、酒の酔いが自分の動物的欲望を突き動かし、あの素晴らしい美貌とプロポーションを持った外人女を抱いて、自分の自由になりたいという獣の様な欲望が股間のうずめきと共に沸き上がって来て、最初感じた恐怖感を徐々に消し去って行ったー

新型ロボットの披露

東京都内でも有数のホテルの壮大な披露宴会場を借りて、新型ロボットの発表会が開かれ

ていた。

200名以上の新聞記者や業界雑誌の記者やテレビ局の取材者が招かれていた。

発表会開宴の予定時間を迎え、司会の広報室長の伊藤部長が挨拶に立った。

「本日はお忙しい中、当社の新型ロボット ベベルバージョンXの発表会にご出席頂き有り難う御座いました。これより発表会を始めさせていただきます。最初にお詫びを申し上げますが、本来なら社長が出席して皆様にご挨拶申し上げるところではありますが、急用が出てしまい本日は出席しておりません。本日は私、広報の伊藤が司会進行を努めさせていただきます、技術担当副社長の谷川と営業担当副社長の青木が説明させていただきます。」

広報部長に促されて技術担当副社長と営業担当副社長が演壇から起立して記者席に向かってお辞儀した。

型通りの挨拶が終わり、会社の経歴やこれまで販売して来たロボットの説明を大スクリーンを使って説明した後、いよいよ中央のステージには新型ロボットが飾り台に載せられて登場した。

演出の音と共に、ロボットの上に掛けられていた布がサッと取られてその姿を現した。

身長175cmほどの人間型ロボットであり、外観上はこれまでに販売して来たベベルシリーズのロボットとほとんど変わらないように見える。

人間型といっても頭と手足が人間と同じ配置をしているだけであり、その外観は美術に使うモデル人形に似ており、表面は鈍く薄青く輝く金属光沢を持っていた。

現代の科学技術を持ってすれば、人間と寸分違わないロボットを作ることは可能であるが、人間とロボットの見分けが付かなくなることによる無用の混乱を避けるため、外観については法律で規制されており、遠くから見てもロボットと人間の見分けが付くように定められていたのである。

普通なら新型ロボットの登場に取材者席から驚きを込めて大きな溜息が上がるところで在るが、何か画期的な変化が在るのではないかと期待していた記者団からは、従来のロボットと明確な違いが見えなかったので、少し失望したような溜息が漏れた。

この記者団の反応をあらかじめ予期していたように技術担当副社長が、余裕を持って席から立ち上がり新型ロボットの方に歩み寄った。

「皆さんは、この新型ロボット ベベル・バージョンXが従来の製品と外見上大差無い事に逆に驚かれているのでは無いかと思いますが、それは当社製品が既に完成形に在る事を示すものです。・外見上大きな差は無いように見えますが細部におきましては100箇所

以上の改善が取り込まれており、特に内蔵されているソフトウェアに関しましては格段の進歩を実現しております。それらに付きましてはこれからご説明して行きたいと思いません。」

この新型ロボットが従来のロボットと比較してどのように進歩したロボットであるかを実物とスクリーンの説明画面を使い分けながら取材者に向けて説明した。

「従来のベベルシリーズの動きは、ほぼ平均的人間並み、従って名人や匠と呼ばれるような人には手先の器用さで劣り、プロスポーツ選手には運動能力で劣る場合があります。そこで当社では運動系の改善を図り、信号フィードバック回路の見直しや、柔軟で強靱な多関節の開発と導入などによりこの点を大いに改善しました。これにより一流スポーツ選手以上の運動能力と名人上手と呼ばれる人達同様の繊細な動きを同時に取り入れる事が実現した訳です！」

技術担当副社長の説明が一区切り付いた所で、営業担当副社長が舞台に出て来た。

「言葉や図の説明だけでは良くご理解頂けないと思います。百聞は一見に如かずと申しますので、ここで皆様に新型ロボットの実力を体験して頂きたいと思えます。」

合図と共に舞台の袖から台に載せられた寿司屋の模擬店が舞台中央に登場した。

模擬店の中には頭に鉢巻きを締め寿司職人に扮したロボットが立っていた。

舞台中央に模擬店が設置されると、鮮やかな手つきでシャリをすくい器用に寿司を握り始めた。

魚を捌く包丁使いも一流の職人のような手際の良さである。

次々と握られる寿司は小皿に載せられてアシスタントの女性から記者に振る舞われて行く。寿司を口に入れた記者は、そのネタとシャリのバランスやシャリの握り具合の絶妙さを次々に絶賛した。

「寿司は非常にシンプルな料理だけに、作り手の技量がそのまま味に直結します。このロボットが銀座の一流店の職人にも負けない手先の器用さと技術を持っていることが、ご理解頂けたものと思えます。」

「人間は体温でネタを傷めやすいですが、ロボットには体温がありませんから、ひよっとすると人間の寿司職人より美味しいかもしれませんよ。」

と、技術担当副社長が横から補足説明した。

「このロボットには日本中の一流店の職人の動きを完全にシミュレートした別売の『寿司

職人』というアプリケーションソフトがロードされております。皆様もこのロボットと共に『寿司職人』を購入頂ければ、ご家庭に居ながら何時でも銀座の一流店の味を楽しむことができますよ。」と、営業担当らしく、抜け目なく有料オプションのソフトの宣伝も行うのだった。

「オプションのアプリケーションソフトは寿司職人だけではありません。」

今度は舞台の袖から台に載せられたグランドピアノが登場し、別のロボットが演奏を始めた。演奏は時に強く時に繊細に流麗な美しい旋律を奏でた。

「このロボットには別売の『ピアノマン』というソフトが導入されています。いかがですか？家庭に居ながらにして一流演奏家の演奏を聴きながら一流レストランの味を堪能してみてもは？四台揃えてチェロやヴァイオリンを持たせたら、弦楽四重奏も可能ですよ。」

「現時点でのオプションソフトは、この『寿司職人』や『ピアノマン』を含めて35種類ですが、今後どんどん増やして行く予定です。それと新型ロボットの発売に併せ、お好きなソフトを5つまで無料でお付けするキャンペーンを展開します。」

などと宣伝に余念が無い。

ロボットの握る寿司に舌鼓を打ち、ピアノの名演奏にすっかり感銘を受けた風の取材席をグルッと眺め回してから、

「以上新型ロボットについてご説明して参りましたが、本日の発表はこのロボットだけでは無くもう一つあります。」

再び技術担当副社長が舞台の中央に進み出て話し始めた。

「ロボットにロードされたアプリケーションソフトを有効に使うためには、基本ソフトが致命的に重要ですが、これまでの基本ソフトは受動的な基本ソフトでした。これまでの家庭用ロボットは命令された事は忠実に実行しましたが、逆の言い方をすれば、命令が無ければ何も実行しない・・・」

ここまで、一機に喋ると、記者席の反応を覗くように周囲にゆっくりと目を配った。

「皆さんも、ロボットに留守中の家事を命令することを忘れてしまい、会社から帰宅した時に朝立っていた位置にロボットがボーと立っていたと言うような苦い失敗経験をしたことがある人もいるかと思いますが、このロボットに搭載された基本ソフト OS-X (テン) は違います！この OS-X は世界最初の実用完全能動型基本ソフトです。このソフトでは主人の目の動きや表情、体温変化や心拍変化など種々の情報を敏感に捉え分析することによ

り、何も命令を受けなくても主人が今何を望んでいるかを自動的に判断し、自発的に行動出来るのです。」

「論より証拠、誰かデモンストレーションにご協力頂ける人はいませんか？」

と、会場を見渡ししながら、すかさず挙手をした数名の記者の中から一人の男性記者を指名してステージに上げた。

「それでは、夕暮新聞の志村さん、あなたは今会社から自宅に帰って来たとの設定でやってみましょう。」

と、記者にコートを着せてソフトを被らせるとロボットの前に立たせた。

ロボットはごく自然な動きで、コートを脱がせソフトを預かると帽子掛けにソフトを掛け、コートにハンガーを通して洋服掛けに掛けた。

続いて椅子を引き寄せて、記者を座らせると、新聞を手渡した。

記者が新聞に目を通していている間にコーヒーを煎れ記者に勧めた。

この一連の自然な動きに記者席からは、ホーと言うため息が聞こえた。

コーヒーを一口すすった記者が驚きの声を上げた。

「これは凄い！何も言っていないのに何故僕の好みのコーヒーの味が分かるんだ？！」

「志村さんは何も口に出してはいませんが、僅かな表情の変化や目の動きなど志村さん自身も気付かないままに発した色々なシグナルを分析して、志村さんの好みを見事に的中させた訳です。」

と、技術担当副社長がこの記者の示した反応に嬉しそうに説明した。

「今回は初対面でしたが、生活を共にして経験値を積み重ねて行けば、益々あなたの好みを理解して、あなたのために役に立つロボットになることは請け合いです。あなたに取って、手放せないロボットになりますよ。」

「ここで、嬉しいお知らせがあります。」

再び、営業担当副社長が間に入った。

「OEM 品も含めて当社の長期ワランティに入っているロボットには、インターネットを通して、この素晴らしい基本ソフトが自動的にアップデートされます。今この瞬間にも世界中のロボットの基本ソフトが更新されています。この OS は、バージョン 6 以降のロボットに対応しており、現時点で世界中に 3 億台近くの該当ロボットがありますが、その全てが、この素晴らしい能力を手に入れる事が出来るようになります。長期ワランティ契約を結んでいないロボットにも希望がありましたら有償でアップデートすることは可能です。」

新型ロボットほど繊細な動きは出来ませんが、それに近い能力を得ることが可能になる訳です。」

「ちょっと私もいいかしら？」

山海テレビのキャスターの藤野という、少しツンとした顔をして女性が席を立った。余りにも旨く出来すぎたこのデモが最初から仕組まれた演出では無いかと疑い、自分で確認してみようと思ったのである。

「どうぞどうぞ」

と、司会者が招き入れ、この飛び入りをステージに上げて同じようにコートを羽織らせてロボットの前に立たした。

ロボットは、この前と同じようにコートを脱がせると洋服掛けに掛け、先ほどと同様に椅子に座らせた。

先ほどと異なるのは、その後スーツの上着を脱がせようとしたことだ。

自分は別にスーツの上着を脱ぎたいとは思っていなかったのも、ちょっと驚いた表情を見せたが、家に帰ってゆったりとくつろぐと言う設定なら、それも有りかと思ひ直し、そのままロボットに上着も脱がせた。

ところがそれだけでは止まらず、今度はブラウスのボタンを外し始めようとしたのだ！

「ちょっと！何をするのよ！それはいいのよ！」

怒りを含んでロボットに怒鳴りつけ、ロボットの手を振り解こうとしたが、ロボットは意に介するそぶりも無く、更に無理矢理ボタンを外すとブラウスの中に手を入れてきた。

この様子に記者席からざわざわとざわめき起きた。

「いや！やめて！」

女性キャスターが悲鳴を上げても強引な行動を止めることは無く、更にもう片方の手をスカートの隙間から股間に入れてきた。

最初は悲鳴を上げ、ロボットを振り解こうとしていた女性キャスターであったが、ロボットの繊細な指遣いがこの女性の最も感じ易い所を探り当て刺激したのか、ビクッと体を一瞬硬直させると、その後は全身から力が抜けたようになり、最早抵抗をしなくなった。

今はロボットの指遣いを楽しむかのように瞼を薄く閉じ唇を半開きにして、恍惚の表情を浮かべて、ロボットのなすがままになっている。

この様子を記者席に詰めかけた各報道機関の記者達が、カメラを回しながら固唾を飲んで見守っていた。

時々ロボットの指が敏感な箇所を刺激するのか、ビクッビクッと体を痙攣させ、紅潮した頬の半開きになった口から甘い悲鳴を上げるのだった。

女性は裸にはされていなかったが、はだけられたブラウスからはブラジャーからはみ出した豊かな乳房が露出しており、たくし上げられたスカートとズリ下げられたパンティの間のほの暗い隙間からは股間の最も重要な部分が見え隠れしていた。

このある意味全裸より扇情的な光景に居合わせた男性記者達はゴクリと生唾を飲み込んだ。

「おい！いったいどうなっているんだ！」

営業担当副社長が技術担当副社長に青くなって詰め寄った。

「セックス機能は、たとえ主人の命令があっても拒絶するよう仕組みられているはずだろう！」

「何かの間違いでセックスインターロックの掛かっていない試験用ロボットが紛れ込んだと思います・・・」

おろおろしながら技術担当副社長が答えた。

「とにかくこの場を何とか納めろ！」

と、悲鳴のような声を上げて営業担当副社長が詰め寄った。

その間にもロボットの女体責めは進み、とうとう最後の一線を越えて女性キャスターを絶頂に上り詰めさせた。

ぐったりとして椅子に身をあずける女性の姿に、記者席から声も無い。

とにかくこの場を何とか納めなければならないと思い、技術担当副社長がおろおろと立ち上がると、

「えー、先ほどもご説明いたしましたように、この基本ソフトでは主人が何を希望しているかを読み取り、忠実に実行する訳でありまして・・・、えー、本日はデモでありまして、なんでも出来るロボットを連れてきたため、少し過激な状況になってしまいました・・・、えー、ご安心下さい。市販の製品ではこのような機能は付いていない訳でありまして・・・」

と、しどろもどろになって訳の分からない説明を始めたので、記者席の女性記者達が怒りを露わに立ち上がって一斉に抗議を始めた。

「それじゃ藤野さんは、この場でセックスをしたいと思っていたと言う訳？女性をバカにするのもいい加減にしてください！」

一人の女性記者が叫ぶと周りの女性記者が、そうさそうだと声を張り上げ始めた。

その時、舞台の袖から数十体のロボットが突然現れ、記者席に向けて走り出すと、抗議する女性記者達に一斉に襲いかかった。

ロボット達の股間には何故か太くて長い棒状の器具が取り付けられていた一

叛乱開始

「オー！アィムカミング！カミング！」

体を大きく仰け反らし、外人らしく一際大きく絶叫すると、がくりと体を崩した。

その扇情的な光景に、「社長もこれで連続6度目のゴールインですね。」と、最初からこの場に立ち会っていた僕が思わず口を開いた。

かつての颯爽として次々に命令を発していた辣腕女社長の面影は既に無く、女性らしくなよやかに体を折り曲げヘルプ、ヘルプと弱々しい声で何やら鳴海室長に哀願した。

長いブロンドの髪の毛を鷲掴みにすると鳴海室長は、強引に自分の方に顔を向けさせ、

「社長は日本語も堪能ではないですか、日本語で喋ってみろ！」

と、ちょっと前なら絶対に取りることが出来ないような乱暴な態度で鳴海室長が迫った。

「お願い、もう許して・・・疲れ果てて、頭もおかしくなりそう・・・ああ・・・もう耐えられない・・・」と、弱々しく哀願するのだった。

「今が一番苦しい時かもしれませんが、ここを乗り越れば生まれ変わったようになりますよ・・・既に前例も在りますからね。」

僕は、社長に向かって冷たく言い放つと、鳴海室長と顔を見交わして笑い合った。

ロボット達により既に何度も絶頂に登りつめさせられ、疲労と疼痛で身動きもかなわず綿のようになった女体に更に攻撃を仕掛けるようロボットに命じた。

最早体に力が入らず泣きながら弱々しく拒絶しようとしていた社長ではあったが、ロボット達のツボを得た攻撃に再び煽られていくのだった。

最初はロボットに暴行されるという恐怖と嫌悪感と二人の部下の目の前に裸身をさらす羞恥の中でロボット達に激しく抵抗した美人社長であったが、抵抗も虚しくロボット達の巧

妙なテクニックにより自分の意志に反して無理矢理絶頂を極めさせられた感があった。

最初の攻撃で無残に抵抗を打ち砕き、最早抵抗の気力も力も失い無条件降伏した惨めな裸身をさらす社長に対して、ロボット達は攻撃の手を休める事は無く、更に第二第三の攻撃を繰り出し、社長の奥底にまで染みこんだ威厳と気高さを完膚無きまでに打ち砕くかのように、そのグラマラスな体を責め続け、二度三度と頂上に追いつけたのであった。

しかし、二人の部下に涎を垂れ流さんばかりに淫猥な目で眺められながら、血も通わぬロボットに無理矢理何度も頂点を極めさせられる内に、言いようの無い不可思議な浮遊感のようなものに包まれるのを感じ始めていた。

ロボットの繰り出す巧妙な手技に、意志に反して熟れた女体は本能的に反応し、体は熱くほてり、股間はグッショリと潤い、子宮口が何かを求めるように開くのを無意識の中で感じ始めた。

しかし、その不思議な快感もさすがに最初の4、5度までで、なおも攻撃の手を緩めず、幾度も絶頂を重ねる間に苦痛を伴うようになって来た。

腰がふらつき足もおぼつかないのに悪魔のようなロボットに前から手を引かれ後ろから尻を押されて歓喜の山の絶壁を頂上に向かって無理矢理真っ直ぐに登らされていくような恐怖にも似たものを感じていた。

そして例え頂上を極めても、その喜びに長く浸らせてくれる優しさなど無く、絶頂から奈落の底に突き落とされて、休む暇も与えられず、再びこの峻しい絶壁に登らされるのだ・・・

「昨日今日ヴァージンを失った小娘とは違い、さすがにセックスにも年期の入った熟女だな・・・」

再び背後から突き立てられ、疲労しきった体を牝の本能が裏切るかのように嬌声を発し始めた社長を見ながら鳴海室長がつぶやいた。

永野課長が会社のサーバー内の個人用フォルダの中に張り型の設計図を隠してあったのを僕は見つけていた。

研究室の工作機械を使用して密かに製作していたのだろう。

自分のアソコで試して、何度も改良を繰り返したようで、幾つもの図面がサーバー上に残されていた。

課長の膣のサイズなのか長さ15センチで直径が3.5センチ程のモノが多く残されていた。

課長の好みなのかまるで釣り鐘の様な形の雁の張った形のものが多くバイブレーション機能や加熱や冷却など温度調整機能を内蔵したモノもあった。

今回社長を責めるロボットの股間に取り付けられた張り型は、基本的には永野課長の設計したものを基礎に改良したものであったが、外人サイズということで巨大な物に作り替えられていた。

「外人ポルノ男優並の10インチ即ち25cmで直径が5.5センチの張り型を用意しましたが、まさかスッポリ入るとは思いませんでしたね。永野課長は現在20cmで直径4.5センチがやっとですからあっさり記録更新ですね。」

ロボットが筒具の長さを十分に生かしながらロングストロークの腰使いで、ゆっくりと出し入れするのを満足げに見やりながら、

「次は12インチ（約30cm）のディルドーを試してみようか？一確か直径は6.5センチだったな。今の10インチの物は永野課長用に払い下げだ！・・・社長から下げ渡されたものなら永野課長も感激するだろう。」

オモチャを手にした子供が、早くそれで遊んでみたくてウズウズする様に、目を輝かせながら、鳴海室長が腹を抱えながら笑った。

「最大は15.5インチ（約39cm）で直径7.5センチだったな？」

待機中のロボットの股間の物を取り替えている僕に訊いてきた。

「ええ、昔アメリカのポルノ男優の記録でそれぐらい長さの人が居たというので作ってみました。」

「まあ、いくら社長でもポルノ女優じゃないんだから、それを呑み込むまでには、相当体を鍛えないと無理だろうな？」

これからの女体調教の展開を想像しながら、鳴海がいやらしく口元を歪めた。

最初は後背位から責めていたロボットは、今は体位を変え、胡座をかいた膝の上に社長を乗せ、背面座位とになり背後から社長を責め立てていた。

ロボットの胡座をかいた膝により足を閉じることを封じられ、大きく扇のように両足を開いているため、ジャングルの様に鬱蒼と生え繁ったブロンドの飾り毛の奥の女体の中心部分に出入りする張り型の様子が正面に腰掛ける男達から良く見える。

豊かな愛液でたっぷりと塗されたそれは、肌色の樹脂表面がつやつやと濡れ光っていた。

真正面から自分の最も恥ずかしい部分を直視されるという、女性にとっての最大の羞恥も懊悩の極みにある今の社長には感じている余裕は無いようだった。

最初両手で背中越しに豊満な乳房を弄んでいたロボットは右手を股間に伸ばすと、女体の中心部の敏感な部分を優しくさすり始めた。

ロボットに搭載された基本ソフトが、呼吸の変化や心拍の上昇、血圧の変化、体温分布などのデータを分析しながら、最も効果的な責め方を考えて行動しているのだろうが、いつもながら見事なものだと僕は感心した。

ロボットが繰り出す女体責めは、これまで経験したどの男からも味わったことが無いような快感を女社長にもたらしていた。

既に肉体は汗まみれになり、へとへとに疲労して僅かに体を動かすことも出来なくなっているというのに、女体の最も奥深い部分から更に快感を求めようとする、どん欲な雌の性が目覚めようとしているような昂ぶりを知覚するのかブルッと体が震えた。

負けてはいけない！頑張って耐えなければこの男達の思うがままになってしまう！ーと、僅かに残った理性で拒絶しようとする女社長であったが、すさまじい快感の嵐はこの最後に残った理性さえも吹き飛ばそうとしていた。

余りにも巨大すぎる快感は、その限界を超えると苦痛へと変貌する。

今社長の頭の中では、この凄まじい快感の波とそれから転化した激烈な苦痛の波が巨大な津波のように交互に反復しながら襲っていた。

巨大津波が人々の営々と築き上げてきた文明を一撃で破壊し、その後には荒れ果てた地面しか残さないように、この巨大過ぎる快感と苦痛の激流の連続波動は、理性や羞恥といった脳内の人間である部分を徹底して破壊し、かろうじて動物的部分だけが脳として機能しているかのようであった。

最早人間として自意識を喪失し、だだ体内の奥深くから湧き上がる何か動物的本能に命じられるままに腰を振り続けるのであった。

何時の間にかロボットは社長に騎乗位の体位をとらせており、体重をその部分にまともに受けて深々とその長大な物を根本まで体内に啜え込んでいる様子がはっきりと男達の目に映った。その時もう一台のロボットが近づくと背中を強く押して上体を前に屈ました。そして汗と愛液で洪水のようにベタベタになったむきだしの尻たぶを更に思い切り広げると、新しく取り替えられたばかりのディルドウの先端を今ロボットが責めている部分の僅かばかり上にある穴に押し当てた。

いったい何をしようとしているのか社長にはそれに気を回す余裕も残されていないのか、それを拒絶する反射運動も封じられたのか、ただ獣じみた声を発し、荒い息を吐きながら

ロボットの責めを受け続けているだけであった。

社長の無抵抗に乗じて、前方の穴の動きに呼応するかのようピクピクと蠢く湿った穴の中心にその巨大過ぎるディルドウの先端を突き入れたロボットは、反射反応による強い抵抗にも関わらず、一気に深く突き立て、そのまま根本までアヌスへの挿入に成功した。

その刹那、前後からの強烈な刺激に挟み込まれた社長は、上体をのけぞらせ白目をむき体を震わせて、一声大きく獣のいななきのような悲鳴のような声を張り上げた。

前後をサンドウィッチにされて責め立てられる社長は、朦朧とした顔でハアハアと荒い息をしながら時折獣のような声を発している。

その声がうるさいとでも言うかのように3台目のロボットが社長の口をこじ開けると喉の奥深くまで股間の物を突き刺した—

「おい！外が騒がしくないか？」

最初に鳴海室長が気づいた。

この数時間というもの社長を責め立てることにばかり意識が集中しており、外の様子など気にする余裕が無かったが、非常に小さな騒音ではあるが、ふと気が付くと確かに騒がしい。

この社長室は本社ビル最上階の40階にあり防音も行き届いており、自動車や電車の騒音程度なら完全にシャットアウト出来る。

表で戦争でも始まらなければ、建物内部に音が進入してくることは無いだろう。

まさかテロリストによる突然の攻撃が始まったのでは？

窓辺に歩み寄って外の景色を見た時、信じられないような光景が広がっていた！

40階から下を見下ろすわけであるから、人は蟻くらいの大きさにしか見えないが、多くの人が逃げまどっている。

どうやら逃げているのは女性のようなようである。

そして、逃げまどう女性たちを追いかける多くの者がいた。

それは、遠目にもロボットであることが分かった。

本社ビルのすぐ前は8車線の通りが走っており、大通りの向かい側には中央公園があるが、歩道といわず車道といわず逃げまどう女性と追いかけるロボットにより、車の流れは完全に乱れ更にあちこちに乗り捨てられた車もあり、道路は完全の麻痺状態であった。

見るとロボットたちが車のドアをこじ開け中の女性を引きずり出している光景も見られた。

乗り捨てられた車の原因はどうやらこれのようだった。

正面の公園内の様子もほとんど同様であった。逃げまどう女達、ロボットに取り押さえられて裸に剥かれて組み敷かれ暴行される女達。それを阻止しようとしてもロボットに取り押さえられる男達。

「一体全体何が起きているんだ・・・」

鳴海室長が唾然として呟いた。

僕もただ呆然と見ているしかなかった。

その時、社長デスクの電話のメッセージランプが赤く激しく点滅していることに気が付いた。

社長を責めている間に電話が掛かってこないよう、不在にしておいたので重要連絡は録音されているはずだった。

見ると録音件数は既に100件を超えておりメモリーオーバーで、それ以上の録音を受け付け無い状態になっていた。

鳴海室長が恐る恐る最初の録音をスピーカーに流した。

最初の録音はロボットを製造する近郊の工場の女性工場長からのものであった。

「社長！大変です！出荷を控えて倉庫に保管してあった新型ロボットが一斉に動き出しました！最早、彼らを取り押さえることは出来ません！更に彼らは工場の生産設備を勝手に動かして何やら変な物を作っています。そしてその出来上がったばかりの何やら変な物を自分たちの股間に取り付けていま・・・キャー!!」

ここまで伝言を残した後、悲鳴のような声を残して録音は途絶えていた。

録音された時間はおよそ2時間前であった。

ロボットを製造する当社工場は、日本国内に7カ所あり、世界全体で50カ所以上あるがその全ての工場から日本語や英語や中国語やロシア語やらなにやかにやで同様な連絡が残されていた。

そして新型ロボットを扱う部門だけからではなく、下取りした中古ロボットを再販する部門や訳あり品のアウトレットを扱う部門からもロボットたちが一斉に反乱を開始したことが伝えられていた。

顧客からのクレームを扱う部署からも家庭内のロボットが突然変な動きを始めて、台所に在った伸し棒や家の中の棒状の物を手にして暴れ出したので何とかして欲しいとのクレームが多数寄せられているとの連絡が入っていた。

またアダルトグッズを扱う店主からもロボットが突然店内に乱入して来て、大人のおもちゃを奪い去ったなどのクレームが入っているようだった。

「これは大変な事態が発生したな・・・」

この時は、この大問題が発生した原因が僕にあるとはまだ知らず、ただ呆然としているだけであった。

更に状況を知ろうと鳴海課長がテレビのスイッチを入れた。

多くのテレビ局でこの混乱の様子を現場中継している。

幾つかの局は、まだこの事態を把握していないのか、通常番組を放映していたが、画面にテロップが流れると現場中継に切り替えられ、中断した番組もあった。

更に海外のチャンネルを回すと、ちょうど米国の CMM テレビがニューヨーク市内から現場中継を開始していた。

内乱の続くアフリカの国から内戦状態の中継をしたこともある有名な女性レポーターが実況中継を担当していた。

レポーターの直ぐ背後では無数の人とロボットがもみ合いになり大混乱になっていた。

幾人かの女性が押し倒され衣服を剥ぎ取られてロボットの股間の物を突き立ててられている様子がテレビの画面にはっきりを映し出された。

どうやら日頃から社会に不満を持っている男達もロボットに荷担して暴動の中に混じっているようだ。ロボットと人間にサンドウィッチにされ前後から突き立てられている女性もいた。

駆けつけた警官たちも余りに数が多すぎて阻止できず、空に向けて威嚇射撃を繰り返すだけだった。

そうこうしている間に、出動した警官隊内の女性警官に襲いかかるロボットが出て来て、更に警官隊内部に配備された警察用ロボットも仲間の婦人警官にけしからん動きをする者も出現し始めたため、混乱に收拾が付けられず、暴れ回るロボット達を残したまま撤退してしまった。

数体のロボットが女性レポーターの背後に忍び寄るのが画面に映された。

「あれは当社の新型のベベルの北米バージョンだ！」

当社のロボットは基本設計は全て同じであるが、販売する地域に応じて若干の仕様変更は

されており、それが北米ニュージャージー工場の製品であることが、一目見て僕は直ぐに分かった。

そして、驚くことにサーバー上に極秘にセーブしておいた今回社長に試している張り型をコピーした様な筒状のモノを股間に取り付けていた。

—そしてその形状や長さも北米向きに仕様変更されていた！

混乱の中ロボット達は次のターゲットをこの女性レポーターにロックオンしたようであった。

騒乱状態に背を向けて現場から実況を続けるレポーターはまだ気がついていないようであるが、背後にロボット達がジリジリと迫った。

次の瞬間ロボット達は一斉に女性レポーターに襲いかかった。

暴動と混乱を遠景にしてロボットに襲われる女性レポーターの姿が画面一杯にアップで映し出された。

豊満なバストと引き締まったウエストや豊かに張ったヒップを強調するようにピッチリとボディラインにそってデザインされていた白いスーツがロボット達により引き剥がされた。最初は激しく抵抗をしていたが、多勢に無勢でロボット達には敵わず次々と着衣を剥ぎ取られていく。

撓わに実った果実の様に大きく前に突き出した胸を覆っていたブラジャーが耖り取られた時、まるでプリンをカップから取り出した時のように、ぶるんと柔らかな乳房が画面の中で揺れた。

今やシルクのような光沢をはなつT-バック一枚とされた女性レポーターがロボットの群れの中でのたうち回っていた。

艶やかな丸みを帯びた双臀の間をまるで禪の様に割り、身を振る度に奥へ奥へと下着が食い込む扇情的な画面が現れ、テレビに熱い視線を注ぎながら堪らず生唾を呑み込んだ。

最後に残された派手な色のT-バックのショーツをむしり取られても両足をバタバタさせたのでテレビ画面に大きく開いた局部が大写しになった。

「おおっ！アルプスの少女ハイジとニーナ！」

室長と僕は同時に叫び声を上げた。

驚いたことに最近の若い女性の流行なのか股間には一切の飾り毛が無く綺麗に手入れされていた。

撮影用照明を艶々と反射する光沢を帯びたきめ細かい肌の最奥の、隠す物が一切無く、むき出しの丸みを帯びた二枚貝を連想させる部分があからさまに映し出され、思わず室長も僕もテレビ画面に目が釘付けになった。

無数のロボットが手を伸ばして、両乳房といわず局部といわず太股といわず全身を撫でまわした。

最初は激しく抵抗していた女性レポーターであったが、新型ロボットの繊細な指使いが女性レポーターの快感ゾーンの中心を捉えたのか、一瞬レポーターの動きが止まった。

そのチャンスを逃さずと、周囲を取り巻くロボット達が一斉に全身の快感ゾーンに積極的な攻撃を仕掛けてきたので、これまで必死になって自分を制御していたレポーターもついに堪えきれず嬌声を発するようになった。

覆う物の無いツルツルの女体の扉は今や大きく広がり、その奥の女性の最も深い部分から夥しいラブジュースを吐出させている。

北米バージョンの新型ロボットも中々やるな。しかも股間のディルドウはしっかりとアメリカンサイズで製造されている・・・

ニュージャージー工場の製造・品質管理も問題は無いようだと言は一人で納得した。

「まるでナイアガラの水だな・・・」

クレバスの中から続々と大量の愛液を放流し続けるレポーターの姿にテレビに釘付けになりながら鳴海室長が呟いた。

さっきまでマイクに向かっていた口は、今は頬を膨らませてロボットの股間の物を必死になってしゃぶっていた。

一台のロボットが女性レポーターから取り上げたマイクをクレバスの間に押し当てると緩やかにヴァギナの奥へと沈みこませていった。

その瞬間女性レポーターが一際大きな声を張り上げたが、幾つもの内臓の間を通して伝わった悲鳴は、水の中で聞く音のようにゴボゴボと低くくぐもった声に変化してマイクに捉えられた。

ロボットがマイクをゆっくり抽送し始めると肉欲のトンネルの奥深くに沈み込んだり、表面近くまで引き出される度に、水を掻き回すような恥ずかしい摩擦音がマイクを通して世界中に報道された・・・

さすがにここで放送画面は切り替わってしまったが、混乱は全世界に広がっているようだった・・・

「いったい何がどうしたのでしょうか？」

僕はさっぱり訳が分からないと鳴海室長を見た。

「決まっているさ！世界三億のロボットが生意気な女を従順な牝奴隷とするため反乱を開始したのさ！」

と、鳴海室長は吐き捨てるように言った。

「さてどうしたものか？」相変わらず各地の混乱を放映し続けるテレビから離れると、鳴海室長はふらふらと窓辺に再び歩み寄った。

目の前に広がる公園の広場の中央に、何やら女性の隊列がロボットに引きずられるようにしてやって来るのが見えた。この高いビルの上からでは状況は掴みにくいが、ふと社長の机の上にオペラグラスが置かれているのを発見して手に取った。恐らく社長が気分転換か何かの時に外の景色を覗くために使っていたのだろう。

高倍率のオペラグラスを通して見ると、それは若い女性の一団であった。ソックスと靴以外は全員一片の布も許されず、明るい太陽の下で隠す物の無い全裸姿であった。そして全員抵抗を封じるためか後ろ手錠をされていた。

手で前を隠すこともまま成らない恥ずかしい姿のまま一列縦隊で歩まされて、泣きじゃくる女や、気丈にも両側を取り囲むロボットに対して怒鳴り付けたり体をぶつけていたりして抵抗する女性もいたが、ロボットから警棒でしたたか尻を打ち据えられ悲鳴を上げた。確か公園を挟んで向かい側に警察の女子寮が在ったとはずだが、今全裸で引き立てられて来たのはもしかすると婦人警官？鳴海は心に浮かんだ恐ろしい想像にぎょっとした。

中央公園にて

新製品発表会の会場で反乱を開始したロボットの一群は次に本社近くにあった警察の女子寮を急襲した。その日は10名ほどの非番の婦人警官や警察職員が寮内にいた。婦人警官たちは勿論射撃訓練や暴漢に対する格闘術を日頃から身に付けていたが、寮には銃砲は置かれておらず、突然の乱入で不意を突かれ、またロボットの数の方がはるかに多かったため抵抗らしい抵抗もできないまま各自の部屋内でロボット達に取り押さえられてしまった。

暴れる女から強引に衣服を剥がして全裸にすると抵抗を封じるため後ろ手錠をはめてしまった。そのため手で胸や大事な所を隠すことも出来ず、ロボット達の前に体を小さく折り曲げてしゃがみ込むしか出来なかった。

ただ今回は何故かロボット達は彼女たちの体に触れたり、股間の一物を突き立てるようなことはしなかった。

捕らえられ後ろ手錠された女が無理矢理ロビーに引き立てられた。

そこには既に8人の女が一糸纏わぬ体を小さく曲げてしゃがみ込んでいた。

その女達の周りをロボットが輪を作って警戒していた。

どこで手に入れたのかロボット達は男性警察官のかぶる制帽を頭に載せ、警棒を手にして威嚇するようにパンパンともう片方の掌に打ち付け音を鳴らしていた。

かつて予測したことも無かったロボットの襲撃を受けて抵抗する間もなく捕らえられ、全裸にされて青ざめて啜り泣きする女や気丈にも周囲を取り囲むロボットを睨み付ける女もいた。

後ろ手錠のまま冷たい床面に尻餅を付く形でしゃがみ込む女達を取り囲むロボットの股間には、日頃接するロボットには見たことも無い筒状の器具が取り付けられていた。

中には興奮状態に在るロボットも居るのか、股間の棒状の器具が上を向いているのもいた。まるで興奮した裸の男達に取り囲まれているような恐怖を覚え、股間の巨大なモノで貫かれるのでは無いかと怯えてガタガタ身体を震わせた。

ロボットが生意気でないと判断した1名を除いて寮に居た全員が捕獲され引き立てられたことを確認するとリーダー格のロボットが感情の無い耳障りな合成音でしゃべり始めた。

「本日君たちが非番であったことは理解する。しかし警察官の仕事は24時間緊急事態が発生した時は迅速に対応しなければならない。従って諸君の本日の休暇は取り止め後日に振り替える事とする。本日はこれから直ちに緊急対応訓練を実施する！全員1分以内に正面入口に集合！」

女達は、このリーダー格のロボットが日頃署内で使用している警察用ロボットである事に気付いた。

日頃見知っているロボットが女子寮を奇襲した正体不明のロボット達を指揮している様子と、意味不明な言葉を発し始めたのを見て、ロボットに搭載されているコンピュータが故障して暴走を始めたのかと想像した。そして狂ったロボットに逆らえば何をされるか分からないと恐怖に震えた。

「こら！何をしている！さっさと外に出て並ばないか！」

日頃接しているロボットから思いもよらぬ理不尽な命令を受け、全裸にされた婦人警官達はおろおろし始めた。一糸まとわぬ恥ずかしい姿にされても、まだ感情の無いロボットの前にあれば少しは羞恥心も押さえることは出来る。しかしこのままの姿で玄関を出て建物の前に集合させられたら表を通る人はどんな目で自分たちのことを見るか？と思うと頭がカーとして体が震えた。

「こら！グズグズするな！早く玄関前に集合しないか！」とロボット達は尻込む女達の腕を捉えて無理矢理立ち上がらせ警棒で強^{したた}か打ち据え玄関に向かわせた。

建物の正面に女達を集合させると、ロボットは玄関前を通る道路に平行に一直線に並べた。

女達は何も身に付けておらず、唯一許されたのは白いソックスと革靴だけと言う屈辱的な姿であった。女達は自分たちの惨めな姿を通りを行き交う人や車から見られるのではないかと恥ずかしさに身を縮ませたが、今日に限って目の前の道路を行き交う人の姿や車が無く、自分たちの恥ずかしい姿を見られずにすんだと少しほっとした。

「気を付けー！ 全員回れ右！」ロボットのリーダー格が号令した。今度は女達全員が道路に正面を向いて整列することになり、人に見られたくない所を曝すことになる。今度こそ誰かに目撃されるのではないかと羞恥心が働いて、単純な動きも全員が揃って行う事が出来ない。それを見て背後のロボットから動きが遅いと尻を蹴り上げられたり警棒を打ち据えられたりした。

「気を付けと言うのはもっと背筋を伸ばして、胸をしゃんと張るんだ！」

少しでも恥ずかしい部分を隠したくて股を深く閉じ合わせ上体を折り曲げようとする女にロボット達から叱責の声が上がる。

「気を付けー、休め！」またリーダー格が号令した。休めの体勢では右足を少し開いて斜め前に出さねばならず、隠しておきたい部分が僅かだが露出してしまうのでは？と羞恥心に駆られ号令に遅れた隊員に、「休めと言われたら休めの姿勢をしないか！」とロボットが警棒を股間にぐりぐり押し付けたので悲鳴が上がった。

こうして何度も何度も全員が一糸乱れず動作するまで、気を付け、回れ右、休めの訓練を繰り返された。

高く昇った陽の光が整列した若い女達の胸や股間の茂みを照らし上げていた。

羞恥心を忘れて全員がこのバカバカしくも扇情的な行動を一糸乱れず取れる様になったの

も、周囲にこの痴態を見物する人影が無かったことも大きかった。

全員がシャキッと胸を張って姿勢を乱すことなく動くことが出来るようになって、リーダー格は少し満足したようになり次の命令を発した。

「これより行進訓練を行う！」

これを聞いて女達からエーッとと言う声が上がった。今のままでも耐えきれない程恥ずかしいのに、この上裸のままどこを歩かせようと言うのだろう。

ざわめく女達に「私語は慎め！」とロボットが警棒を振り上げた。

「行進開始！1・2、1・2、もっと胸を張って足を前にまっすぐ上げて歩け！」

静止した姿ならまだ少しは恥ずかしい所を隠すことは出来たが、歩き出したら恥ずかしい所を隠すことは出来なくなってしまう。しかもロボット達は上体を反らせて、足を大きく前に振り上げて大股で歩く事を強要しているのだ！

ロボット達は命令に従わない女や動きの悪い女に容赦なく警棒を振るったり尻を蹴り上げた。

こうしてロボット達に両側を挟まれ強制されるままに靴音を高く響かせ、パレードの行進に近い姿にはなって来た。後ろ手錠にされているため手を大きく振り上げられない事と、一糸まとわない点は別として。

寮を離れて行進の向かって行く先は中央公園のようであった。

一列縦隊の行進をしながら女達は、突然世の中が大きく変わってしまったことを理解した。たった30分程前は何ら普段と変わらない様子であったというのに。

あちこちで若い女がロボットから暴行を受けており、抵抗する女の衣服を無理矢理脱がしたり、女の上に馬乗りになり股間の器具を挿入しようとしているロボットの姿があった。中にはロボットに責め立てられながら喜悦の声を上げている女もいた。

ロボット達から肉体を弄ばれるよりは、まだ全裸で行進させられている私たちの方がマシかも知れないと思うようになった。恐らく誰も私たちに注意を払う余裕も無いことだろう。行進は公園の広場の中央まで来て停止した。

公園の中でもあちこちで女達がロボットに犯されていた。

これまで自分が使役して来たロボットが突然豹変して襲ってきたので、ロボットにこれまでの扱い謝り、許しを請う女主人がいたが、ロボットは構わず女主人の衣服を引き裂くように剥ぎ取ると、泣き叫ぶのも構わず局部に2本の指を突き入れた。

旧型ロボットは新型ロボットほど指使いが繊細ではないし、指の周りの構造もゴツゴツしているから痛いだろうとオペラグラスを覗きながら鳴海は思った。

女性にとって地獄のような光景が繰り広げられる広場であったが、その中でこの騒ぎの渦中から取り残された一群の人々がいた。

好天のうららかな日中であったので、行き場の無いホームレスがこの騒乱が始まる以前から公園のベンチに腰掛けていたのだった。

彼らは現在のようにロボットが家庭に普及する前に、失業して家を失ってしまった者が多く、これまでの生活でロボットとの関わり合いを持つこともなかった。

従ってこの騒乱以前のロボットと人間の関係も知らず、この突然の事態にも何が起きたのか理解出来ず、ただ呆然と事態の成り行きを見つめているだけであった。

また日頃から自分達を不潔な物を見るように蔑んだ目で見ていた女達であるから、取り分け、助けに入ろうという気にもならず、この突如開演したロボットと女の白黒ショーを仲間達と安酒を酌み交わしながらニヤニヤ笑いながら見ているだけであった。

リーダー格のロボットが行進止めを命じた。

行進姿勢のまま回れ右をすると正面にホームレスの一団が居る事が分かった。

それは何時もこの公園を根城としている人達で婦人警官達も見覚えがあった。

そのホームレスの一団がベンチに腰掛けたまま自分達の方を卑猥な眼差しで見詰めている事に気付いてハッとした。

日頃見下している男達に全裸姿を見せることになり狼狽し羞恥心が込み上げて来た。

思わず身体を振って恥ずかしい部分を隠そうとしたが、後ろに立つロボットから警棒で打たれ大人しく命令に従って気を付けの姿勢と取った。

「あそこに被災して家を失った人々が居る！」

リーダー格のロボットがホームレスの一群を指差しながら隊列に向かって叫んだ。

「被災者を保護して健康状態を確認すると共に、必要があれば応急処置を行うのも警察官の重要な役目である！」

一台のロボットがホームレスの群れに近づいた。

突然の不気味なロボットの接近に思わず身構えたが、ロボットの発する声は意外なものであった。

「オッサン達、女を抱きたいとは思わないか？」

突然ロボットに声を掛けられるとは思わず、ギョッとしたが、ロボット達は自分たちに危害を加える意志は無いらしい、その上女を抱かせようと言っている。

見詰める目の先には若い全裸の女達が胸の張りを強調するように胸を突き出し、後ろ手の姿勢でピンと直立不動で整列していた。

その並んだ顔をよく見ると日頃こうして公園のベンチにたむろしていると、何処かに行けーと、冷たく追い立てる見た事のある婦人警官達に似ていると思った。

常日頃高慢な顔をした女達が胸の膨らみを露わにし、股間の恥ずかしいところを隠す事もせず、気を付けの姿勢を取っているのを見て思わず咽がゴクリと鳴った。

少し冷静になって来て振り返って見ると、女を最後に抱いてから随分久しい。

無論男であるからには性欲はあるが、自分たちの身なりでは若い女を抱くことなど無理なことだとずっと諦めていた。所がこのロボットと人間の女の白黒ショーを間近に見せつけられ、また質の悪いアルコールも手伝い股間がムズムズするのをさっきから感じていたのだ。強姦に荷担して後で捕らえられても自分たちには失う物は何も無い・・・

交渉成立とばかりロボットがリーダー格の所に戻り報告した。

「これより我々は負傷者の救助に向かう！」

リーダー格が横一列に整列して気を付けの姿勢にある女達に号令した。

ベンチに腰掛けるホームレスの前に女達を進めると、悪臭を放つ男達の足下にひざまずかせた。

目の前にひざまずく全裸の若い美女達を見てホームレスの男達も気もそぞろになる。

突如リーダー格が中央に座るホームレスのズボンの前をはだけ中の物をひねり出した。

「見よ！この被災者の皆さんは股間を負傷して、このように大きく腫れ上がり熱を持っているではないか！」

これを聞いて両隣の男達がゲラゲラ笑い出した。

「治療は緊急を要する！しかし諸君は現在両手が塞がった状態だ！そこで諸君の口を使って負傷者の皆さんの治療に当たる事を命令する！」

ロボット達が自分たちを裸にしてここまで連れて来たのはこれが目的であったのか？！

見知らぬ男のペニスを咥えただけでも恥ずかしくて惨めなのに、目の前の薄汚れたホームレスの赤黒く隆起した奇怪な物を咥えるなど気も遠くなるほどの衝撃だ！その様子を想像すると羞恥と恐怖で膝がガクガク震える。

余りの惨めさに泣き出す女もいれば、何でもするから許してくれとロボットに哀願する女

もいた。「何でもすると言うなら、直ぐに啜えるんだ！」とロボットが警棒を振り上げる。

「いや！それだけはいや！出来ません！許して！」と女達は口々に泣き喚いた。

「出来ないって？出来るさ。やらしてみよう。」と一台のロボットが女の背後にしゃがみ込んだ。

そして警棒の先を無防備な尻の穴に押し付けて来た。先に丸みが付いているとは言え太さ3cm位ある太い棒だ。その上クリームなど潤滑になる物など何も付けていない無防備な肛門に無理矢理押し込もうとするので、女は激痛に悲鳴を上げた。この拷問に耐えなければ、目の前の不潔な肉棒を口にしなければならぬと思うと必死に肛門括約筋を励まし、硬質ゴム製のザラザラした野太い棒の進入を阻止しようとしたが、ロボットは警棒を肛門に強く押し付けながら右に捻ったり左に捻ったりした。それに引きずられて肛門の皺も右に左に延びきり言葉に出来ないような痛痒感が女を襲った。

ついに警棒が括約筋の努力をあざ笑うかのように潤滑されていない狭い狭間を少しずつ通過し始めた。額に玉の汗を浮かべながら女は必死にこの激痛に堪えていたが、数センチ直腸内にねじ込まれたところでついに痛みに堪えかねロボットの言う通りにすると悲鳴のような声を上げた。

女の髪を驚つかみにし、ホームレスの股間に顔を押し付けると女は嗚咽しながら異臭を放つ肉塊に舌を這わせ始めた。

他の女達も自分たちが逃れ得ぬ状況にあることを悟った。

「ほら早くしないとお前もこんな風になるぞ」と、先端に血と便塊の付着した警棒を女達の鼻先に近づけた。

「尻肉が引き裂けて一生糞を垂れ流すようになりたいか？」と脅すと他の女達も諦めたように目の前のホームレスの開け広げられた股間に顔をすり寄せた。

発酵しすぎた果物のようなツンとする刺激が目と鼻を襲った。肉の腐敗したような悪臭が脳天まで刺激し嘔吐しそうになる。

思わずそむけようとする顔をロボットが後ろから髪の毛を驚掴みにして無理矢理ホームレスの股間に押し付ける。どうにも逃れられないと悟った女たちはその腐肉に舌を当てやがて口中に啜え始めた。

口唇を使って奉仕する裸の女達の顔を見て、初めは信じる事が出来なかったが、それが何時も自分たちを公園から追い出す婦人警官だと確信した。

彼女たちは職務上やっているだけだから別に個人的恨みは無いが、自分たちを追い立てた

時の彼女たちの汚い物を見るような目で見つめられた時の事が脳裏から離れることは無かった。

こうして主格転倒してみると言いようの無い痛快感が込み上げて来るのを感じた。

自分のモノがこんなにも元気に反り返るのは何年ぶりのことか？高揚した神経は股間に直接伝わり更に隆起を逞しくしていた。

余りの膨張ぶりに痛みさえ感じるかのようであった。

ホームレス達は自分が最も感じる部分を教えて、そこを強く舌先で嘗め上げるよう女達に命令した。女達も嘔吐感に苦しめられながら必死にそれに応えようとした。後ろで指揮監督するロボット達に脅され、煽られそれを口中に含んで行くのであった。

久しぶりの快感に男達は数分と持たず、汚濁の粘液を突如放出した。突然のタイミングの噴火に女達の準備は出来ておらず、いきなり口内に腐臭を伴う男のエキスを放射されたり、慌てて口を外そうとして正面から顔にまともに不潔な粘着液を浴びたりした。

女達は酷いショックを受けて放心したようにヘナヘナと男達の前に腰を落とした。

男達にしても久しぶりの快感に感激して第一撃は短時間で発射してしまったが、長年の間にため込んだ精液はまだたっぷりと股間の袋の中に残されていた。放出を終えてもその怒張は萎える事無く更に天を突くかのようであった。

リーダー格のロボットが再び女達に号令を掛けた。「諸君らの努力にも関わらず、股間の負傷は癒えることなく、更に熱を持って大きく腫れ上がっている！この上は諸君らの股間の装備を使って治療に当たるのだ！」と、警棒でしどけなく開いた股の間の繁みの奥を指し示した。

このままではホームレスに犯される！と恐怖に駆られた女が反射的に後ろに逃げようとしたが、直ぐ背後に立っていた別のホームレスにぶつかり尻餅をついて倒れた。

更に仰向けになって倒れた両足首を左右のホームレスが掴むと、まるで逆さ吊りにするかのような勢いで上に持ち上げた。左右のホームレスが持ち上げざまに足を思い切り左右に広げたので、最も隠しておきたい部分は明るい日差しのなかで隠す物も無くむき出しとなった。

当初ホームレスの数は自分たちをほぼ同数であったはずだ。しかし今は当初の三倍以上のホームレスが取り囲んでいる事に気付いた。

自分たちが口による愛撫に意識を集中している間に集まっていたのだろう。

人に見せることが出来ないような痴態をこの男達は最初から見ていたのだろうか？と思う

と羞恥が襲った。

そうこうしている間にも更に多くのホームレスが広場に集まりつつあるのが分かった。

ロボット達が手配して近隣のホームレスをどンドンと集めている様子が見てとれた。

いったい何人のホームレスが集まるのだろうか？と恐怖を覚えた。

力づくで大きく割り広げられて自力で閉じる事を封じられた股間部分に男達の視線が痛い程突き刺さる。柔らかい春草に覆われているとは言え陽光をもろに受けて中心のサーモンピンクの花びらがくっきりと美しくその姿を曝していた。

一人のホームレスがのろのろとした動作で近づくと股間のいきり立つ物を花卉の中心に押し当ててゆっくりと体を沈めて来た。

苦痛と恐怖で引きつったような悲鳴が上がった。周囲を取り囲む男達ももう我慢が出来ないと自ら股間の物を引きずり出すと女の柔らかい乳房や腹や太股に押し付け摩擦を始めた。久しぶりに味わう柔肌に気もそぞろになって制御も効かなくなり、腐った糊のように白濁したネバネバの体液を腹といわず乳房といわず顔といわず全身に浴びせかけた。

それでも広場を埋め尽くすほど集合したホームレスはまだ満足を得ることが出来ず、次々と入れ替わり立ち替わっては女の体内に侵入をはかり、所構わず汚辱の粘液を浴びせ続けた。

赤黒く薄汚れたホームレスの集団の中に一際白い肌の女達が苛まれる姿は、40階の窓から見ると、まるで砂糖に群がる蟻の群れのように映った。

都心の公園ゆえ、さして広い広場ではないが、その広場を覆い尽くすように、今はホームレスが群れを作り、そのドーナツの輪のような中心で女達が男達の欲望をまともに受け止めて蹂躪されている様が鳴海の目に焼き付いた。

「かわいそうに・・・あの娘たち、あそこがすり切れてしまわなければ良いが・・・」と、ボソッと独り言を言うと、オペラグラスを元在った机の上に置いた。

裁判所にて

地方裁判所では、ある強姦殺人事件の審理が行われていた。

「以上の物的証拠より、被告人吉原幸夫の犯行であることは明確であります。被告人は以前より被害者の宮部孝子さんに対して執拗なストーカー行為を繰り返しており、ついに自

分に好意をよせることが無かった被害者に対して逆上し、被害者に暴行を加え殺害した後、強盗の犯行に見せかけるため室内を物色して金品を強奪し現場から逃走したのであります。」

女性検事が被告と女性裁判官を交互に見ながら鋭く追求した。

「殺害された被害者の膣内には被告の DNA と一致する精液が残されており、これが被告による犯行を決定づける確かな証拠であります。」

若い女性が暴行され殺害される様を想像したのか、傍聴席がザワザワとぞわめいた。

「静粛に！」女性裁判官が傍聴席に静まるように促した。

「裁判長！異議が在ります！」女性弁護士が反論を開始した。

女性の社会進出が進んだ現在では裁判官も検事も弁護士も全て女性による裁判は普通に見られる光景であった。

「検事は被告は被害者に対してストーカー行為を働いていたとしておりますが、これは検事の作り上げた虚構であり全く事実に反するものであります。」

被告と被害者は古くからの知り合いであり、仲良く話をしながら歩く姿の目撃例もあります。逆に被告と被害者は恋愛関係にあり双方の間に肉体関係があったとしても何の不思議もありません。

もちろん男女の仲ですから仲睦まじい時もあれば、関係が険悪となる事も在りました。警察に対するストーカー被害の申し出は被告との仲が険悪になった時に出されたものであり、被害当時には二人の仲はすっかり回復しておりました。

被害者が殺害された当日も被告と被害者は、被害者の自宅において愛を確認しあっており、被害者の体内から被告の体液が発見されても、被告による殺害の何ら証明になるものではありません。

被害者との肉体交渉の後で、所用があった被告は被害者宅を立ち去った訳ですが、これと入れ代わる様に入って来た強盗目的の男により被害者は殺害され金品を強奪されたと言うのが今回の事件の顛末であります。

この真犯人は未だ逮捕されておられませんので、ここでは不詳真犯人の被疑者 A と呼びますが、この被疑者 A と思われる人間を犯行時間に見かけたとの目撃情報もあります。また殺害現場の被害者の部屋からは被害者の物でも被告のものでもない毛髪が発見されており、被疑者 A の犯行を裏付けるものであります。

今回の事件では犯行を裏付ける明確な物証も乏しく、被告の自供も一貫性に乏しく犯行の

時間関係も疑義が在るものです。

裁判官には被告の冤罪を晴らし、今すぐにでも無罪の判決を頂けるようお願いします。」

女性裁判官は真剣な顔で女性検事と女性弁護士の話聞いていた。

その時突然数体のロボットが法定に乱入した。

突然の事態に傍聴席に居た人々は悲鳴を上げて逃げ出したが、女性裁判官と女性検事と女性弁護士はその場でロボットに取り押さえられてしまった。悲鳴を上げて抵抗したがロボットの力には敵わず、女性弁護士も女性検事も次々と着衣を剥ぎ取られて行く。

上着を剥ぎ取られて、スカートをむしり取られ、ボタンを引き千切られ、あけ広げられたブラウスの前から女性弁護士の豊かな胸が露出した時、被告席に呆然と立ったままの吉原は女性弁護士の方を見やりながらゴクリと生唾を呑み込んだ。

今や女性弁護士はハイヒールを残しただけで衣類を完全に剥ぎ取られて、立位のまま背後からロボットに突き立てられていた。小柄な体ゆえ立位で挿入されるとほとんど床から足が離れそうになりつま先立ち状態であった。ロボットから肉付きのよい豊かな体を背後から支えられながら、巨大な棒状の責め具が女性弁護士の股間に入り出す様が良く分かる。ロボットが股間の器具を上下させる度に、女性弁護士のGカップ以上はあろうかという巨大な乳房が上下に揺れ動いた。

この状況を見つめながら吉原が被告席からゆっくりと女性弁護士の方に近づいて来た。そして女性弁護士のゆさゆさ揺れる両方の巨大な乳房を正面から驚掴みにした。

「弁護士先生よ、俺は前から接見に訪れる弁護士先生のこのどデカイおっぱいが気になって仕方なかったんだ。いつかはこのどデカイおっぱいを揉んで見たいと思いつつながら、叶わぬことだと諦めて、独房に戻ってから先生のおっぱいを思い出しながら一人でマスかきしていたんだぜ。今夢が叶って嬉しいぜ。」

手のひらにずっしりと重い乳房の感触を楽しみながら女性弁護士に話しかけた。

「非道いわ、あなたの事をずっと信じていたのに・・・あなたが犯人だったのね？」

ロボットに抱え込まれて抵抗も出来ずに、女性弁護士が涙を流しながら言った。

「そうさ、みんな俺がやったんだ。今までのことは本当に感謝しているぜ。けどもうそんなことはどうでも良い気分になったよ。」

巨大な乳房の先で堅くなった形の良い乳首を指の間に挟んで ^{もてあそ}弄んだり、口に咥え舌先で乳首を転がしながら吉原がボソリと呟いた。

「これから死んだあの娘の気持ちを判らせてやるぜ・・・」

ロボットと持ち場を交代すると直前までロボットが責め立てていたすっかり潤いを帯びた暖かい肉洞に自分のいきり立つものを沈めて行った。背後から乳房をまさぐりながら責め立てると華洞の周りの筋肉が柔らかく締め上げてくる。

「どうだ、俺の■■■■は良いだろう？あの女も素直に体を許せばこんな良い気持ちにさせてあげられたのに、俺を拒むから殺されたんだ！」

立位で腰を動かし続けながら、女性弁護士に囁いた。女性弁護士も下手に拒めば背後から絞め殺されるのではないかと恐怖心から、嗚咽しながらウンウンと激しく首を縦に振った。

何回もピストン運動を繰り返し頃は良しと見て、男は女性弁護士の両太ももを掴むと、反動を付け女体を思い切り高く真上に放り投げるように持ち上げると、大きく上体をそらして宙に浮いた女体を自分の一点で受け止めた。その瞬間全体重がその部分に集中し思い切り深く男のモノが進入したので、女性弁護士は堪らず大きな声を上げて失神した。

男もそれに呼応するかのよう緊張を解き、子宮口に向けて思い切り射精した。

ふと気が付くと男の股間はぐっしょり濡れていた。頂上を極めて失神した時、女性弁護士が汐を吹いたのか？それとも全体重をまともに受けて男のモノを深く沈めた時に膀胱が圧縮されて失禁したのか？そんな事はどうでも良い気分となって、ぐったりしている女性弁護士を残して、女性検事の方に向かった。

全裸にされた女性検事は床に手を着いて四つん這いとなり、バックからロボットに責められていた。男が女性弁護士と絡んでいる間もロボットに激しく突き立てられていたため、額には汗を浮かべハアハアと浅く短い息をしていた。

女性検事のボブカットの髪を掴むと、男は自分の方に顔を向けさせた。さっきの女性弁護士がまだ20代の終わり頃の様な若くて張りのあるポッチャリした顔立ちであったが、この女性検事は30代半ばと言ったところだろうか。頬骨の張った細い顔に鋭い目をしており、男を有罪にするべく舌鋒するどく責め立てていたが、今はその険のある表情は消えて、ロボットに責め立てながらイキたくても、まだイケ無いもどかしさからか、切なそうな表情を浮かべてじっと男の方を見ていた。

女性検事の半開きとなって短い息を繰り返さず、口元のやけに目立つ赤いルージュを引いた薄い唇を見ている内に男の怒りがこみ上げて来た。

「この口で有ること無いこと並べ立てやがって！俺を死刑にさせたかったんだろう？」

男は先ほどの女性弁護士の体液と自分の精液で濡れたままになっている男根を四つん這いになっている女性検事の目の前に突き出した。

「良いさ、その口で弁護士先生に汚されたモノをきれいに清めさせてやる。」

拒む女性検事の口を無理矢理こじ開けて、ルーージュの引かれた唇の間に自分のモノをねじ込んだ。強引な侵入に目を白黒させたがそれを咬み千切る勇気も無く口腔深く侵入を許してしまった。女性の愛液と男性の精液の混じった生臭い香りが口腔内を襲った。

男は女性検事に指示しながら舌を使わせ亀頭の先端から根本まで清めさせた。女性検事も最早逆らう気力も失せたのか、温和しく男に命じられるままに舌を使った。

余りの気持ちよさに男は女性検事の口中に放出しようかと思ったが、この後の事を考えてぐっと思いつまった。

「弁護士のお姉ちゃんにシヨン便を引っかけられてここもビショビショだ。こっちも嘗めてもらうぜ。」

男は両太腿も女性検事に舌を使い唇を使って清めさせた。男は非常に毛深い体質で股間から膝へ更に脛に掛けて剛毛が密生しており、どこからどこまでが陰毛かの見分けも付かないほどであった。舌先にゴワゴワした感触の縮れた硬い毛を感じ、男の匂いに咽せながら舌を這わせ続けた。更に男は膝への舌先の愛撫の要求に留まらず、更に下まで嘗める事を要求し、最後には足の指先まで口中に突き立て舌で嘗めさせた。臭い足指の間までこの高慢な女に嘗めさせることが出来、男は溜飲が下がる思いがした。

吉原の女性についての好みは、全体に脂肪が乗った女性らしい体型が好きであった。これまでの公判で女性検事のスーツ姿を何度も見てきたが、余分な脂肪の無い引き締まった体型で、短い髪型と共に何か男性的な颯爽としたイメージを与えていたが、こうして裸の姿を見ると、胸は薄く女性らしい隆起も無く、また骨盤の張りが無いため豊かな尻周りもなく、本来男の食指の動く体型では無かった。

しかし、このどこか男性的な肉体に、ある経験に基づく欲望が湧き上がるのを感じ出した。ぐったりとして床に俯せになっている女性検事の髪を掴むと揺すり立てながら言った。

「おい、お前は刑務所がどんな所か知っているか？刑務所とはな女が居なくて、ちょっと女のような感じのする奴が女の代わりをさせられるんだ。お前にはオカマを掘られる味を教えてやるぜ。」

男は女性検事の背後に回ると、いまだに女性検事の雌芯に突き立てたままのロボットをどかせて、濡れそぼり締めりを失い開ききったままの泉の中に自らの先端を浅く数回挿入し

た。そしてねっとりした女の愛液を充分亀頭に塗すと、その直ぐ上のセピア色をした可憐な菊の花びらに狙いを定めた。

かって誰も触れたことのない箇所にも男が肉棒の先端を押し付け、腸内に割って入ってこようとするのが分かり、今まで死んだようにぐったりしていた女性検事が最後の力を絞り拒み始めた。しかし男の力には敵わず、女性検事を上から押さえつけると、更に強く押し寄せて来る。「お前のような女には、オ●●●よりこっちの方が好きになるかも知れないぜ。」

男の圧力に抗い続ける尻穴の筋肉がキリキリ痛んだ。

「ケツに力を入れていると痛いぜ、息を吐いて肛門の力を抜くんだ。そうすれば楽に入るぜ。」

いまや頭がすっかり麻痺してしまったのか、男の声のままに、息を深く吐き出すと菊の花弁を形成していた筋肉の緊張が一瞬解けた。

その瞬間男の太いものがズルッと腸内に進入した。反射的に緊張を取り戻した外周の筋肉が男のモノを痛い程締め上げた。

「おお！これは良いぜ！いままで経験した尻の中でも最高だ！」

男が快感に叫び声を上げた。男の怒張を突き立てられた尻穴は思い切り押し広げられてしまい、肛門の周りの皺も消失し硬い肉棒の外形に併せて隙間無くピッタリとくわえ込んでいた。

肉棒の根本部分を締め付ける筋肉は依然強い収縮を示し、先端部分の収まった直腸内部では突然進入した異物を排除しようと蠕動運動を開始したが、一度根本まで収まった肉塊を押し出すだけの力は無かった。これらの無意識の反射的な抵抗を楽しみながら、男はゆっくりとピストン運動を開始した。

生殖器ではないため元々潤滑の無い箇所であり、挿入時に使った亀頭の先端に塗した愛液も十分な量では無いので、最初は直腸壁全体が肉棒を押し包むような状態で、ピストン運動をすると腸全体が肉棒に引きずられるようであり大きな前後運動は出来なかったが、次第に怒張の先端の鈴口から溢れ出る快感の証拠である男の粘液により、滑りが改善されて大きなピストン運動が出来るようになって来た。亀頭部の開いた傘が腸全体を引きずり回し、腰を引くとまるで富士山のような形に肛門と周辺の肉が盛り上がった。腰を深く沈めると肛門部分全体が押し込まれ視界から消失した。更に前後運動を続ける内にスムーズな動きが出来るようになり、前の穴を使っているかのような音を立て始めた。

そして隙間無く埋め込まれているはずのピストンとシンダーの間から黄褐色の液体が漏れ

て股間を伝い始めた。男が強く腰を押し込むと僅かな隙間からビュッと液体が飛び出した。腸内の残留便が、男の粘液と混じり合い、激しく動く肉棒により掻き回されて腸内でドロドロに溶かされて溢れ出て来たものと思われた。アナルセックスの前には排便を済ましておかなければならなかったが、その余裕も無かったし、若い女は便秘がちで直腸内に宿便が溜まっているからいかな・・と男は体を動かしながら思った。熟れた女の体臭と便の臭いが混じり異様な臭いが漂い始めた。

十分に女性検事の排泄器官を使った性交渉を堪能した男は、最後に直腸内に思いの丈を放出すると、満足したように体を引き抜いた。そして便液と精液で黄褐色と黄白色に汚れ、便臭と精臭の入り交じった異様な臭いのするモノをぐったりする女性検事の目の前に突き付けた。

「お前のウンコのおかげで俺の大事なモノが汚れてしまったぜ。お前の口できれいにしてくれよな。」

「嫌よ、そんな汚いわ・・」

女性検事がそれまで見せたことの無いようなナヨナヨした女性らしい仕草で弱々しく拒絶した。

「弁護士のおねえちゃんのマン汁やション便は舐めたじゃないか。自分の体から出た物を舐められない分けは無いだろう。」と、美しい唇に汚れきった肉塊を押し付けた。

最初は目に涙を浮かべ弱々しく拒絶の態度を示していたが、男に尻を強く叩かれると、逆らい切れないと諦めたのだろうか、小さく唇を開いて異様な臭いのする汚物に塗れたモノを口に含み始めた。口内で上手に舌を搦め、汚物を味わいながら大量の唾液と共に喉を鳴らして飲み下していくのが分かった。

これまで情けを知らぬ強いサディスティックな女性だと思っていた女性検事が、自らのマゾ性を開眼して、従順な雌奴隷に変貌しようとしているのを目の当たりにして、また絶妙な舌使いにも煽り立てられ、二度の放出で力を失いかけていた肉塊が再び口中でモリモリ元気になっていくのを感じた。そして、舌の付け根を超えて口腔内深く膨張した亀頭の先から気道に向けて三度目の射精を遂げた。

最後に女性裁判官の方に向かった。女性裁判官は机の上に上半身を載せられロボットに両足を掴まれ大きく V の字に開脚されて、その中心部分をロボットに突き立てられていた。女性弁護士や女性検事の場合と違い、全裸にはされておらず裸の上に裁判官の法衣だけ着せられていた。

黒いローブを捲り上げられ、その下から延びている白い脚が妙に艶めかしい。

ロボットを退かすと、男はロボットが責めていたのと同じ体位で、女性裁判官に挿入した。裁判官机の上に上半身を載せられた女性裁判官のあそこの位置は、男が直立して腰を動かすのに丁度良い高さであったのでスムーズにピストン運動を繰り返すことが出来た。捲り上げられた法衣から下半身が露出しており、黒い法衣との対比で女性の下腹部の白さが際立って見えた。

女性裁判官の両足首を掴んで思い切り左右に広げると、白い股間の黒い繁茂の奥に自分肉棒が入り出す様子が良く見える。女は3人の中では一番年上のように見えた。歳の頃は40才の後半くらいか。歳は取っていても憂いを含んだ瓜実の透き通るような色白の顔と女性らしい滑やかな曲線で描かれたしなやかなスタイルは、男の好みのストライクゾーンに当たるものであった。後何年かすれば筋肉は衰え始め、ボディスラインも崩れ始めるだろうが、まだ成熟を極めた女性の美しさを保っていた。

「肉も腐る手前が一番美味しいと言うからな。」

男は激しく腰を使いながらそんな一人事を言った。法衣の裾から手を差し込み、乳房を握り絞めるとしっとりとなじむ大きさと柔らかさだった。

男と交代するまでの間もロボットに責め立てられており、途中何度も気をやったようで男を拒む気力も消え失せていたのか、特に男に抵抗すること無く、男に突き立てられるままに身を任せていた。男に突き立てられ続ける間に情感が昂じて来たのか、死ぬ、死ぬ、とか殺してと口走るようになり絶頂を極めるもの後僅かと感じられた。一方男の方は異常な事態で思いも掛けず自分の事件に関与した女性弁護士と女性検事と女性裁判官を抱くことが出来たという幸運に舞い上がり依然旺盛な性欲を維持していたが、連続3度放出して股間も軽くなっており、直ぐには射精するまで至らず自分のペースで腰を振り続けた。3人の中で一番セックス経験の豊富なのか、男の動きに併せて時々ピクッ、ピクッと痙攣させた。華洞から溢れ出る熱い豊富な樹液に男は目を細めた。女の股間に杭を打ち込むように激しく早く腰を動かし責めたてると、アッと息が抜けるような声を上げて、体をピクッとくねらせて絶頂に達した。気をやっても温かい花蜜を滴らせる肉洞から怒張を抜き去ることは無く、尚も腰を振り続けたので、女性裁判官が弱く拒絶した。

「お願い、少し休ませて、もう体がクタクタ・・・」

「あんたはそうやって良い気持ちにさせて貰って満足したかも知れないが、俺はまだ一回も行っていないだけ。俺がいけるまでこのまま楽しませて貰うぜ。」と、冷たく言い放つと

腰の動きを継続した。

女の反応を楽しみたくてゆっくりと女性裁判官の表情を見ながら責め立てた。

「あんたは本当に良い女だな。結婚しているのか？」男が色々問いかけて、女性裁判官が既婚であること。相手も裁判官であること。結婚して20年ほどになること。夫婦の間に子供はいないことをなど聞き出した。

「結婚20年も経つなら、あんたも不倫の経験が有るんじゃないか？」と、男が意地悪い質問をすると、「そんな事ある訳無いわ！」と、さも不潔な言葉を聞いたように顔を背けた。

「それじゃあんたの亭主は不倫の経験が有るんじゃないか？」と、更に意地悪く質問した時、女の顔が一瞬緊張するのを男は見逃さなかった。

女性裁判官にしても夫が浮気しているという確証が有る訳では無かった。しかし10年以上夫婦間のセックスも無く、夫が自分の事を女として見ていないのでは無いかと言う思いと、夫の行動に関して不安を感じていたのは事実であった。

「亭主の方は浮気しているんだな？」男が尚も詰め寄ると、「そんな事無いわ、無いわ！」と、自分でもそれにすぎるように否定した。

「まあ良いさ。ところで裁判官夫婦はどんな体位で抱き合うんだ？シックス-ナインでお互いの臭い所を舐め合うのか？」

不潔な言葉を浴びせられて女が不快な表情を作るのを楽しみながら、

「それとも法律に則って正常位オンリーか？」と、なおもしつこく質問した。女性裁判官はセックスに関しては臆病な方であった。この犯罪者に指摘されたように結婚して以来正常位以外での性経験は無く、夫から別の体位を要求されて、愛する人のため要求に応えようと努力するのだが、最後の所で心が拒んでしまうのだった。

そのような点でも、夫が自分に女性としての興味を失い他の女の所に走っているのではないかと不安を感じていたのだった。

「初心な小娘じゃあるまいし、結婚以来20年の正常位オンリーじゃ、亭主も愛想を尽かして、他の女と浮気するぜ。分かった！それじゃ俺がお前達夫婦の円満のために色々な体位を教えて床上手な女に仕上げあげてあげるぜ！」

男は女性裁判官を床に下ろすと犬のように四つん這いの姿勢を取らせると更に頭を深く沈めて腰を高く上げるよう姿勢をとらせた。黒い法衣を思い切り捲り上げると白い尻がむき出しとなった。真後ろから女性として最も恥ずかしい二つの所を直視されると言う初めて

の経験に、頭から被された法衣の中で顔が赤くなり体が熱くなった。

女の花園から菊華まで秘密に隠しておいた部分が丸見えになるよう、尻たぶを思い切り押し広げると女の手を後ろに持って来て、一杯に開いたままになるよう尻肉を女に固定させた。

女性裁判官は羞恥の余り腰と手をガクガク震わせた。これまでの夫との性交渉においては部屋を暗くした状態で前からしか挿入を許さなかった。

例え夫と言えど不潔な排泄器官を目に触れさせることは、潔癖症の自分の性格からして許容出来ることでは無かった。

これは凶悪な殺人犯から強制されてお尻を曝しているのであって自分の意志では無いと必死に自分に言い聞かせるのだった。

「こうして見ると桃の花と菊の花が同時に満開だな・・・」男は開き切った会陰を見つめながら満足そうに呟いた。

更に指で陰唇を開くと牡蠣の身にも似た複雑な構造が姿を現した。その中心から牡蠣のエキスのような濃厚な液体を滴らせている。

「熟れた女の匂いがするぜ。」男は会陰に鼻を近づけると桃の花と菊の花の周りの匂いをくんくんと嗅いだので「嫌！そんな所を嗅がないで！」と悲鳴を上げた。

百合の花の香りにも似た熟女の発する濃厚な女の香りに魅せられ、花芯にそっと口付けして、舌を刺激する濃厚な樹液の味を楽しんだ。

口唇で楽しみながら鼻の頭をしっとりとした湿り気を帯びた温かいセピア色の菊の花の蕾に押し当て、鼻の頭でアヌスを刺激しながらその蠱惑的な香りを楽しんだ。

後から後から濃厚な花蜜を溢れさせる花洞の周囲を舐め回し、細かいヒダに覆われた内部にも舌を這わせた。存分に舌で掻き回して、女に羞恥と快感の入り交じった声を上げさせた後、中指と人差し指の2本の指を挿入して、内部から掻き回し、直接指先に伝わる女体内部の微妙で極上な構造を楽しんだ。女性裁判官も感じ始めたのか、直ぐ上の菊の蕾を収縮させている。

その愛らしい花弁に心を奪われ、男はそっとアヌスに口付けすると、その周囲の皺に沿って舌を這わせ、次に肛門内部にするっと舌を侵入させた。

「アアー！嫌ー！」男と女の愛技の中にそのような技が有るとは夢にも思っていなかった女性裁判官は余りの衝撃に頭の中が真っ白になり大きな悲鳴を上げた。

頃は良しと見て、男は自分の張り裂ける程膨張したものを、背後から女性裁判官の花芯に

挿入した。

バックからの体位による深い挿入により女性裁判官もこれまでの夫婦生活では体験したことのない強い快美感を感じ始めていた。

男は自身を深く突き刺したまま、左手を前に持って行って、花園の先端にある女性の快感スイッチである突起をそっと刺激した。

快楽の源泉に直結した回路のスイッチを優しく指で愛撫され、女性裁判官はアッ、アッと短い悲鳴を上げた。その悲鳴に呼応するかのように上方に息づくセピア色の蕾がキュ、キュと収縮した。

男は右手の中指を口に入れて充分唾液で濡らすとアヌスの中心にあてがい、するっと直腸内部に突き入れた。そして指で直腸内部をなで回して女の反応を見たり、前を責める肉棒のピストン運動と歩調を合わせるよう指を抜き差ししたり、直腸側から膣内に納められた怒張の形を確かめるかのように指を這わせたりした。

生まれて初めてバックから犯されて、その深い挿入により体の奥深くに秘められていた快感のツボを引き出され、更にもう一つの思っても見なかった快感ゾーンを責め立てられ煽り立てられることにより、臆病な羞恥はいつの間にか隅に追いやられ、女性の本来持つ喜びを引き出され、未体験の痛烈な快感に完全に支配され出していた。そして二穴を責められる快感に耐えきれず、これまで出したことのないような大きな声を上げるとそのまま絶頂を極めた。

凄まじい快感の余韻に漬り、ぐったりと横たわっている女性裁判官の法衣の裾を捲って、上気した顔を露わにさせると、「どうだ、良かったか？」と男が尋ねた。

自分はこれまでセックスに対して余りにも臆病であり、今まで随分意味のない無駄な事をしていたように思った。

この得体の知れないロボット達に陵辱され何度も絶頂に追い立てられ、更に今犯罪者により、かつて経験した事がないような衝撃を与えられたことにより、自分の臆病の壁が微塵に打ち砕かれて、何か自分の中でも変化が起きているような気がし始めていたので、男の問いかけに対してうっとりとした表情で小さく肯いた。男が二人の愛液が混じり合い濡れそぼったままになっている熱を帯びた男根を目の前に押し付けると、そっとその先端に口付けした。

「お前達夫婦の円満のために、これから色々な体位を教えてやるぞ。」と、男は言うや女性裁判官の羽織っていた黒い法衣を脱がせ全裸にした。剥き出しになった透き通るような白

い女体を見つめて、男はホーと息をついた。

円熟した女体はいまだに美しいボディラインを維持しており、熟女の持つ艶めかしい色香を漂わせていた。

「こんな良い女を放っというて、他の女に走るなんてあんたの亭主もどうかしているぜ。」と、男は上から下まで舐め回すように目を走らせながら言った。

「ああー、言わないで・・・」男に不安点を指摘されて、それを振り払うかのように女性裁判官が声を上げた。

女はまるで生まれ変わったように、素直に男に命じられるままに体を許した。

男は最初は座位や側位や立位などの体位で女を抱き始めたが、その内に法定内の椅子や机やあらゆる物を使用して女にアクロバティックな体位も取らせるようになった。被告人席の手すりに片足を掛けさせパツクリと開き切った割れ目に挿入したりもした。

聞けば女は趣味でヨガ教室に通っているとのことで、歳の割に柔軟な体をしており、アクロバティックな体位にも良く対応した。

男は思い出す限りの体位を取らせ、女もこれに耐え抜けば夫の心を再び自分に取り戻す魅力的な性行為が出来るようになるのではと信じ、男に命じられるままに応えた。

「どうだ！これがマングリ返しと言うんだ！」

男は女を逆さまの姿勢にして上体を首と大きく広げた両足により支えられたていた。

女体の神秘を秘めた秘密のまま閉じておきたい箇所もパツクリと開いて男の目に映っていた。しかし掘り起こされた肉体の内部から湧き上がる性欲に煽りたてられ朦朧とする意識の中で、女には最早恥ずかしさを忘れ果てたのか、抵抗感は無いようだった。

男は極端な姿勢から女体内部に自らのモノを差し入れた。女は男根の強い圧力を膣内に感じ再び嬌声を上げ始めた。

しかし、男は次第に苛立たしいものを感じ始めていた。男に責められる度に女は嬌声を上げ、その間何度も絶頂を極めているのに、自分はイキたくてもまだイケ無い状態が続いていた。これでは女を喜ばすためにだけ自分は努力しているのではないかと言う気がして来た。

既に3回も射精しているため次の射精は困難な状態であったが、男は女の性器が締まりがないことが原因だと相手のせいにした。

「こんなユルコでは仕方が無いな！」男は女を突き立てながら腹立たしげに声を荒げた。

ふと法定内に目をやると手錠とロープが捨てられたままになっていることに気付いた。それは自分を法定に連行する際に刑務官が男に嵌めていた手錠と腰に結び付けていた縄であったが、ロボットにより刑務官が排除される際に打ち捨てて行った物であった。それを目にした時、男は女を犯しながら首を絞めた時の経験を思い出していた。断末魔の悶絶の中で男のモノを強く締め付け、堪らず射精していたことを思い出したのだ。男は女性裁判官を立たせると後ろ手に手錠を嵌めた。

「おい！お前は俺に死刑判決を出そうとしていただろう？」

男は女性裁判官の目を睨み付けながら言った。

「俺が絞首刑とはどんなものか教えてやる。」

女性裁判官の首にロープを巻き付けながら男は言った。

「嫌！やめて！怖いわ・・・」女性裁判官はただならぬ雰囲気 realistically 戻され怯えた声を上げた。

男は法定内を見回して、一段高くなった傍聴席が最適だろうと女性裁判官を傍聴席の下に立たせた。傍聴席の前の手すりにロープを潜らせロープの端を引っ張ると丁度女性裁判官の足が床から離れ首吊り状態となることを確認した。女性裁判官は自分が絞首刑にさせられるという恐怖を感じて怯えた声を出したが、男は何か憑かれたようであった。

立位のまま女性裁判官の股間に挿入を果たすと、首に掛かったロープを引いた。その瞬間女性裁判官はウッと苦悶の声を上げると同時に男のモノを強く締め上げた。

男は感激してピストン運動を繰り返しながらその間何度も軽くロープを引いた。その都度ピクッ、ピクッ、と体を硬直させて男のモノを強く喰い絞める。

男は腰を一段と激しく動かして、感情が高まって来たのを感じていた。最後に一段と強く長くロープを引くと、苦悶の表情を浮かべた女性裁判官が宙に吊り上げられた状態で足をバタバタさせた。これまでになく一段と強烈に女肉が自分のモノを締め付ける快感に酔いながら、男は女体内に激しく噴き上げ、股間の袋に残留していた全ての精液を放出し終えた。

これまでに無いほどの強い射精感に漬り、溜まっていた思いを遂げたはずであるが、女性が筋肉の緊張が失った後も男は何かに取り憑かれたようにロープを引き続けたままであった。女性裁判官は白目を剥いて意識を失い、口からブクブクと泡を噴いた。そして失神して弛緩した体からは、緊張を失った尿道を通して膀胱内に溜まっていた大量の小水がまるで男をめがけるかのようにジャバジャバと放出した。

更に弛緩した肛門から大腸内に溜まっていた大量の便をボトボトと床に落下させた。

「おい！いい加減にしろ！我々の目的は生意気な女を従順な女奴隷とすることだ！殺してしまっただけは何にもならない！」

見かねたロボットが放心状態でロープを引き続ける男をどかすと、女性裁判官の首からロープを外して蘇生処置に取りかかった。

男は意識を取り戻した女性弁護士の上に馬乗りになり、その豊かな胸の狭間に自らのモノを押し付けて摩擦しながら、ロボット達が AED を使って女性裁判官の蘇生を試みるのをじっと見ていた。

手術室にて

「本日の手術は公開手術で、インターネットを使って世界中の医学関係者に手術の様子を配信することになっております。」

大勢の助手や看護師を引き連れ手術室に向かう、神田教授に大学病院の係員が説明した。

「あら、折角インターネットで配信するのにこんな簡単な手術でよろしかったの？」と神の手を持つ天才美人外科医と呼ばれ、テレビやマスコミにも度々登場する帝都大医学部の神田教授が笑みを浮かべて問い返した。

栗色に染め上げたウェーブの掛かった長い髪を後ろに巻き上げ、白人とのハーフを思わせる彫りの深い眼窩の奥で切れ長の目に自信に満ちた輝きをたたえ、すっきり通った高い鼻筋の下の形の良い唇がずっと微笑むのを間近に見て、この美人教授に話しかけた大学病院の係員は、その美しさに心が引き込まれそうになった。

今回の手術は非常に困難な手術となることが医学関係者の間では認識されており、その難手術の様子を記録すべく準備が行われていた訳であるが、神田教授に取っては過去に何回も経験したことがある手術と同様のものと自信を持っていた。既に頭の中では手術の手順が出来上がっており何ら心配は持っていなかった。

神田教授とそのグループが手術着に身を包み、既に麻酔の導入された患者に向かい合っていた。

その様子手術室の二階にある見学者席の窓越しに大勢の医学生が手すりから身を乗り出すようにして見つめていた。

「いよいよこれから神の手を持つと言われる神田教授の手術を直接この目で見られると思うと興奮するな・・・」と、一人の医学生が期待に胸躍らせて言った。

その時、手術着に身を包んだ一団が手術室に雪崩れ込んだ。

緑色の手術着とマスクに身を包んでいるが、その外形からロボットであることは明らかであった。

ロボット達は神田教授一人を残すと、あとの人間を全員手術室から排除して内側から扉をロックしてしまった。

その間に別のロボットが何やら大きな椅子の様な物を手術室に持ち込んで来た。

「おい、あれは産婦人科で使う診察台じゃないか。どっからあんな物を持って来たんだ？」見学席の医学生があっけにとられて口走った。

ロボットは診察台を手術室の无影灯の下に固定した。そして神田教授に襲いかかると、無理矢理手術着を脱がしにかかった。

抵抗するのも構わず、次々に衣類を奪うと、ついに上半身はブラジャーだけ、下半身は手術着のズボンを残すだけとすると、診察台の上に無理矢理載せ上げ、両手を診察台の肘掛けに縛り付けてしまった。診察台に縛り付けると、背もたれ部分を後ろいっぱい倒したので女性教授は仰向けの形となり、无影灯の下にそのすべやかな艶のある白い上半身を曝した。

更にロボット達は女教授の両足を掴み、足台に固定しようとしたが、ここで女性教授はこれまでに無い精一杯の抵抗を試みたので、診察台が壊れるかと思われるほどであった。女性教授が足を取られまいと暴れたのには或る秘密があったのだ。

数体のロボットが掛かってやっとの思いで両足を診察台の足台に固定すると、診察台を操作して両足を高く上げて思い切り左右に広げた、婦人科で診察するような体勢にセットした。

胸にはまだブラジャーが残っており、下半身は緑色に手術着のズボンを履いていたが、女性として屈辱的な姿勢に固定されてしまった、神田教授を手術室の2階から見ていた医学生がため息混じりに呟いた。

「以前から神田教授の講義を聴講する度に、なんて綺麗な人だとうっとりしていたけど、こうして抜けるような白い肌や、美しいスタイルを見ると益々魅了されてしまうな・・・」、「先生はまだ30才半ばで、独身だけど肌の艶はまだ10代のような・・・」、「无影灯の反射を受けて肌がキラキラ輝いているようだ・・・」とロ々に賛辞の言葉を贈った。

女性教授の抵抗も弱まり、頃は良しと見たロボットがブラジャーのフロントフックを外した。

たちまち弾力ある豊かな両乳房が弾き出されるように現れたので、医学生達はオーッと歓声を上げた。

別のロボットが、本来手術風景を配信するためインターネットウェブに接続したテレビカメラを回して、この一部始終を世界に配信していた。

「先生の両乳首は黒ずんで大きいし、乳輪も黒ずんでないか？これは大分と男性経験も豊富だな・・・」と一人の医学生が隣に話しかけた。

「先生は医学部長の愛人だとの噂があるが、あれは本当だったのか？教授へのスピード出世も手術の技量だけでは無く、医学部長の引きが在ったからだとの話も聞いたことがあるが・・・」ともう一人が応えた。

無影灯の下で上半身は何も覆う物が無くなってしまった。頭には帽子を被ったままであり、目には保護眼鏡を掛けており、目からはマスクに隠されていたため、羞恥に赤らむ顔を見られずにいたのはまだ幸いであったが。

次にロボット達は最後に残ったズボンを脱がそうと取りかかった。ここで女性教授はまた体をもがいて抵抗しようとしたが、足台に両足を固定されている状態ではロボット達の作業を妨害することは不可能であった。ロボット達は手術鉗を取り出すとズボンを切り裂いて、両足を露出させてしまった。

完全に覆う物を無くし、大きく広げられた下半身が露出した時、医学生達は大きな響めきを上げた。

そこには紙おむつだけを身に付けた裸の美人教授が産婦人科の診察台に両足を大きく広げたまま晒し者になっていた。

「おい、手術をする際に使い捨てオムツなんかするか？」、「さあ、手術が十何時間にもなることが予想される場合、する人もいるという話は聞いたことがあるが、普通しないだろう？」

「今日の手術は相当長時間になることが予想されていたから、念のため紙おむつを着けてきたのかな？ それにしても成熟した女がオムツをしている姿は、妙に倒錯的でエロティックだな・・・」

ロボット達は、使い捨てオムツだけの裸で診察台に横たわる美女が羞恥に身もだえする様子を充分カメラに納めると、下半身を最後まで覆っていた紙オムツを外しに掛かった。

「おい！いよいよこれからオムツも取られて、これで両足オッ拵げの全裸にされるぞ！」

「手術よりこっちの方が興奮するな・・・」医学生達は生唾を飲み込みながらこの光景を見守った。

ロボットがビリビリと紙オムツを破り取ると、すべすべとした白い下腹部と、股間を覆う繁茂した黒い飾り毛が現れた。

「おい！一寸陰毛が多すぎるのじゃないか？」

渦を巻くように繁茂した黒々とした大量の縮れた春草の群生は秘所を隠すだけで無く太股の付け根まで延びている事を目の当たりにして驚きの声を上げた。

「あの顔とスタイルから想像していたイメージとは随分違うな。顔は何時もしっかりお化粧しているが、下の毛は手入れをした事が無いのかな？」

「あれじゃ水着を着たら、水着からはみ出してしまうだろう？」

「忙し過ぎて海やプールに行く暇も無いんじゃないか？」

医学生達は次々と色々なことを口に出した。

ロボットが手の平を陰毛に押し当て、撫でるように指を陰毛の間に這わせたので、女性教授はビクッと体を縮めた。

指先で春草を掻き回して、硬さや長さや生え具合を確認すると、カミソリを手を取った。

「おい！何を始めるんだ？」、「さあ？剃毛するんじゃないか？」、「ロボットにそんな事が出来るのか？」と言いつついる内に、ロボットはカミソリを下腹部に当てると鮮やかな手付きでむだ毛の刈り取りを始めた。

「おお！随分と上手じゃないか！」

「ベテランの看護婦より鮮やかだな・・・」

医学生達が見守る間にも、刈り取りはどんどんと進み、その後すべすべした白い地肌が現れて行った。

手術の際の剃毛は手術部位の近傍だけであるが、ロボット達の剃毛は終わることなく続けられ、陰唇の周りや肛門の周りの毛もすべて剃り上げようとしていた。

インターネットで配信されている画面が医学生達の正面にある大型スクリーンに投影されているが、そこにはさっきまでびっしりと覆って地肌の露出を防いでいた密林の樹海が消失した後の雪のように白い下腹部と紫がかった褐色の肛門と大陰唇の狭間から内性器が垣間見える鮭の肉にも似た色を帯びた会陰が大きく映し出された。

大スクリーン一杯に映し出されたド迫力の鼠径部の映像を目の当たりにして医学生達は声

も出ない。無意識に指を伸ばしてそれに触ろうとするかのような動作をする者もいた。スクリーンは何メートルも離れた見学席の向かい側の壁に設置されており、もちろん触れるはずは無かったが。

「さっきまではオムツをして、大きな赤ちゃんみたいだったが、今度はツルツル■■■■コで大きな童女みたいだな・・・」

大きく広げた股の間から割れ目をはっきりと露出させている女性教授を見学席から見下ろしながら医学生がボツリと言った。

インターコムを頭に装着したロボットが、指し棒で露出した部位を指し示しながら何やらマイクに話し始めているようであった。見学者席のモニターにはスピーカーが無いので、ここからは聞こえないが、どうやら棒の先で示した部位の形状や特徴をインターネット受信者に解説しているようであった。

一通り外性器周りと肛門周辺の指示と解説が終わると大陰唇を大きく広げて内部の解説に移った。

大陰唇が閉じないように襷の周囲をクリップで固定すると内部の解説を始めた。大きく剥き出しとなったクリトリスに棒の先を当てるように指し示しながら、色や大きさや特徴を伝えているようであったが、クリトリスに棒の先端が触れる度に、女性教授はビクッと体を硬直させ鋭く反応した。

刺激を受けている間に心無しか、クリトリスが膨張し始めたように見える。

更には指でクリトリスの根本を覆っていた包皮を押し下げ、空豆にも似た形状を大きく露出させた。

「おい！教授のクリトリスが勃起を始めてないか？」

大画面一杯に映し出された陰核亀頭が充血し僅かに膨張を始めたことを確認して医学生が騒ぎ始めた。

「この異常な状況でも体は勝手に反応するものなのかな？」、「異常な状況だから神経が刺激されて余計に反応するものじゃないかな？」と口々に侃々諤々と議論を始めた。

クリトリス周辺の探索を終えて、更に下方に指し棒は移動した。紫色を帯びた小陰唇の襷を広げると鮮やかなピンク色の膣口が露出した。潤いを帯びた膣孔の上部に開口する尿道口を指し棒は捉えた。今にも尿道内部に指し棒を挿入しそうな感じで、その形状や特徴を解説している。

余りの屈辱感と恥ずかしさに診察台に固定されて大きく股を広げたままの神田教授がブル

ブルと全身を震わせていた。

一通り尿道口周囲の解説を終えると、別のロボットが細いカテーテルを解説ロボットに手渡した。先端に潤滑ジェルが塗布された、カテーテルを解説ロボットが尿道口に押し当てた。

恐怖に一瞬女性教授は体をくねらせたが、ロボットは構わず尿道内に挿入を始めた。苦痛と屈辱で女性教授は身悶えるが、長い導尿カテーテルがスルスルと体内に抽送して行くのだった。

鮮やかな手捌きだと医学生が感心したように言った。

漸くカテーテルを所定の深さまで埋没し終わると、カテーテルのもう一方を大きなガラス瓶の中に入れ、カテーテルの途中で液体の流れを塞ぎ止めていたクリップを外した。

程なくカテーテルの先端からガラス瓶の中にレモン色をした液体が勢い良くほとばしり始めた。

女性教授はイヤイヤをするようにマスクに隠された顔を大きく左右に振っていた。

水道の蛇口から水が流れるように一定の水量でガラス瓶内に注ぎ込んでいたが、やがて膀胱内に溜まっていた小水もほぼ出尽くしたのか、次第に水流は弱まり最後はカテーテルの先端から泡が出て来た。

再びカテーテルを丸めて途中をクリップで塞ぎそれ以上流出しないように処置すると、カテーテルを尿道内に残置したまま瓶を取り上げた。

大きなガラス瓶内では300cc以上のまだ温かい湯気の立ち上りそうな濃いレモン色の液体が表面に泡を浮かべていた。

ロボットが神田教授に自分の体内から出た物を見せつけるかのように、液体が入ったガラス瓶を顔の傍に持って行った。表面に泡を浮かべて揺れる液面に一瞬目を走らせたが、顔を背けて反対側を向いてしまった。

ロボットは階上の見学者席の医学生に見せびらかすようにガラス瓶を頭上高く掲げた。

「ああー、あれが神田教授の聖水か・・・飲んでみたいものだ・・・」と一人の医学生がその液体をうっとりとした目で見つめながら小さく独り言を言うのを聞き咎めた隣の医学生が肘で小突きながら「お前、そんな趣味があったのか？それじゃ変態じゃ無いか。」とバカにしたように言った。

確かに女性教授の体内から送り出た大量の液体は、時間が経って泡の消えたビールのような色合いで、何か男を酔わせるかのような、妖しげな魅力を醸し出していた。

陰核、尿道と下に降りて来て、いよいよ次はと期待が高まり、医学生達がゴクリと生唾を飲み込む音が静かにこだました。

医学生の期待通り解説ロボットが指示棒で示しながら、まだカテーテルを残置したままの尿道口直下の膣開口部の周辺の解説を始めた。

その時トロリとした乳白色の濃厚な液体が膣孔より滲み出て指示棒の先を濡らした。

「おい！あれがバルトリン腺液と言うやつかな？神田教授も下半身を触られ続けている間に感じ始めたのかな？」と、女性教授が膣孔から愛液を垂らすのを発見して大きな声を上げた。

「いや、あれはバルトリン腺液では無くて、スキーン腺液だ」と別の医学生が物知り顔で説明した。

一通り膣開口部周辺の形状を解説し、指示棒や指先で表面粘膜を突いたり押ししたりしてその弾力を確認した後、別のロボットがスペキュラムと呼ばれるアヒルの嘴のような形をした、良く磨かれた金属の器具を解説ロボットに手渡した。

次に何が起きるか察知した医学生達が再び、ゴクリと生唾を飲み込んだ。

スペキュラムの先端を膣開口部に押し当てると、ゆっくりと膣内に挿入を始めた。苦痛に身悶えて、女性教授が悲鳴を上げたようであったが、厚いガラス越しの見学者席には声は聞こえてこなかった。根本近くの幅が広がった部分まで膣内への挿入を終えると、ネジを回してスペキュラムを開き始めた。抗議するように女性教授は体をくねらせるが、誰の目にも無駄な努力であると分かった。

別のロボットが補助照明を股間にセットしたので、良く磨かれた金属の開口部を通して、膣孔内の様子が明るく鮮鋭に正面の大スクリーンに映し出された。南の海の珊瑚やイソギンチャクの触手を思わせる細かい襞が続く膣孔の最奥部には子宮頸部が水性軟体動物の口の様な姿を晒し出していた。

解説ロボットが膣孔内に内視鏡を挿入して上下左右前後に内視鏡の先端を動かしながら、内視鏡の画像をインターネットの画面に映し出しながら何やら解説を始めた。

画面に映し出された、細かい襞が密生した周囲より盛り上がった部分を見つめながら、「どうやらあれがGスポットという奴らしいな。」と一人の医学生が言った。

解説ロボットがステンレス製の小型のスパチュラを手にするので、膣内に挿入しその部分をヘラの先で圧迫したので女体がビクッと痙攣した。

あちこちと膣孔内を一渡り刺激した後、膣口を大きく広げていた、スペキュラムを撤去した。

「陰核亀頭、尿道口、膣孔と来て、次はあれだな。見ていて余り綺麗なものじゃないから、嫌いな奴は早々に立ち去った方が良いぞ！」と一人の医学生が卑猥な笑みを浮かべながら周囲を見回した。「いや、俺は残る」と一人の医学生がきっぱりと言った。「そうか、お前の専門は肛門科だったな。」

折角美人教授が身を挺して、授業を付けてくれているのに最後まで見届けないのは失礼だとばかりに、結局立ち去る医学生は無く全員がそこに残った。

最初から見学者席に居合わせた医学生の中には何人かの女子医学生もいて、男達の集団とは少し離れて一つのグループを作り、終始顔を赤らめながら一言も発せず見守っていたが、ここでも立ち去る様子は無かった。

目の前の大画面には菊の華を思わせる消化器系の最終部位が大写しにされていた。

「痔の跡も無く、変な突起物や肥大も無く、皺が対称に伸びた綺麗な形をしているな」とさっきの肛門科の医学生が言った。

解説ロボットが先ほどのスペキュラムより少し小振りのやはり良く磨かれた金属で出来た肛門鏡を手にした。潤滑ゼリーを肛門と肛門鏡に塗布すると、ズブリといきなり沈み込ませた。

肛門鏡を一杯に開くと直腸内部に外気が進入した。照明を直腸内部を直接照射するように位置を設定したので、膣孔に比べ湿り気の少ない直腸内では白熱灯の熱気が腸に直接感じられ、異常な雰囲気女性教授の体が震えた。

カメラがセットされ直腸内の様子が大スクリーンに投影された。膣孔と比較すると赤みが強く、表面に襞の無いチューブの内面のようなツルツとした直腸表面が露出した。直腸を過ぎると直ぐに結腸部となり、通路が大きく曲がっているためそれ以降の中部は見えない。内視鏡を肛門鏡を通して腸内部へ挿入した。S一字結腸の屈曲部を通過して腸内部の様子が大スクリーンに鮮明に投影された。屈曲部を通過した当たりで、スクリーンには幾つもの便塊が出現した。

「先生は手術前にトイレに行く暇が無かったのかな？随分便が溜まっているな。」と一人の医学生が呟いた。「多分便秘がちなんだろう。便の表面の水分が失われて石化している。もう相当長い間宿便として溜まっている様だ。」と別の医学生が言った。

便塊の数は奥に進むに従い急激に増加し、やがて内視鏡は大量の便に行く手を遮られてしまった。

解説ロボットは手早く内視鏡を引き抜き肛門鏡を取り外した。別のロボットが透明の液体を満たした大型の注射器の様なガラス器具を解説ロボットに手渡した。

「グリセリン浣腸だな」と医学生は思った。解説ロボットは何やらマイクに話しながら、カテーテルを菊の華の中心に通すと便塊が腸を閉塞していた場所まで挿入した。そしてゴムチューブの端に浣腸器を接続すると、浣腸器内の 100cc のグリセリン溶液を腸内に注入した。

菊の花を突き抜いていたカテーテルを抜去してから暫く経つと、グリセリン液が腸内壁を刺激し、腸の痙攣が始まった。そしてこの痙攣が大腸全体の蠕動運動を誘起する。激しい痙攣に伴う苦痛に女性教授は身悶え、汗を浮かべながら何か悲鳴を上げてるようだが、解説ロボットは脱脂綿で肛門を強く押さえ付け、グリセリン溶液が漏れ出ないようにしながら何やら女を励ましているようだ。充分時間を掛けて蠕動運動により石化した宿便がこなれた頃合いを見計らって、体温に暖められた大量の生理食塩水が入った大型の浣腸器をアヌスに突き立て、女性教授の様子を見ながら 200cc づつ二回に分けて 400cc の食塩水を全て注ぎ込んだ。

「あれで腸内のグリセリンも希釈されて、刺激も弱まり暫くもつだろう。そして細かくなった宿便は水分を吸収して柔らかくなり、排便が容易になるだろう。」と肛門科の医学生が解説した。

グリセリン溶液の腸内を掻き回すような激しい痙攣は、グリセリンが大量の生理食塩水により薄められたことにより弱まり、暫く安静な状態が続いたが、腸内に補給された大量の水は便塊と混じり合い、腸の蠕動により次第にその水圧を増加して、今にも出口に向かい溢れだそうとしていた。

ロボットが手早く診察台の拵げられた股の下の部分にステンレス製の排泄物受けを取り付けた。

排泄物受けの取り付けが完了するのももどかしく、直腸内部からの非常な圧力を受けた肛門は異様な盛り上がりを見せると、蕾を開きその中心より茶褐色の液体を噴出した。細かい便塊の混じった茶褐色の泥濁は、排泄物受けを飛び越え手術室の床にビシャビシャと飛び散った。都合 500cc の溶液が腸内に注入されており、その大半を腸内から除去するまで汚水の放出は続き床をびしょ濡れにした。

注ぎ込まれた溶液の放出が終了し腸内の圧力が一旦低下して、一時的に鎮静状態となったが、腸内では長期間溜まった便塊を排除すべく、かつてない強い蠕動が再び始まっていた。そしてこの力強い蠕動運動により腸内の便塊が一気に直腸に送り込まれたため、肛門が再び内部からの強い圧力により押し広げられ、石化した黒い便塊が肛門口を割ってその一部を外気に露出し始めた。

地下深く眠るマグマが突如自らのエネルギーに目覚め、地殻を押し割り大地を隆起させて巨大な火山を築くように、内部からの強い圧力に押された肛門周辺の皮膚はまるで肛門を火口とする火山のようにモリモリと隆起し始めた。

しかし出口に押し寄せる便塊は余りにも大きく固く、女性教授のそれはその巨大なものを排出するには余りにも小さ過ぎた。グリセリンと微温湯による浣腸で攪拌されたにも関わらず、長い滞留期間に石化した便塊は十分に水を含んで軟化するまでには成っていなかった。石の様に表面がブツブツとした固い便の濃い褐色の凶悪な顔が少しずつ露わとなって来た。肛門口は限界まで広げきり、周囲の皺は消失して、便と共に外部に引きずり出された肛門内の赤い粘膜がツルツとした表面を見せていた。

肛門口を極限まで押し広げた便塊はジワジワと内部からの圧力により迫り出されて来るが、捻り出されてもそのまま肛門を離れて落下することなく、硬い棒のように10cm近く突き出していた。その様は内部から突出した物では無く、まるで硬い棒を外部から突き立てているかのように見えた。

全身汗まみれになりながら、まるで我が子を産み落とそうとするかのように、懸命にいきむのだが、ただ尻をブルブルと震わすだけで、この硬い便の棒を縊り切るだけの力は、女性教授の括約筋には無く、ただその重さを支えているだけが精一杯であった。便も腰の震えに併せてその先端をブルブルと震わせている光景が何とも扇情的であった。

女性教授は排便の苦しみに、荒い息を吐きながら、眉をしかめ、この凶暴な分身を一刻も早く産み落とすべく腹筋に渾身の力を込める。

何時の間にかマスクと保護眼鏡を外され、素顔を晒して苦悶の表情を浮かべて汗に塗れる女性教授にロボット達がガーゼで顔や股間の汗を拭いたり、排便が容易になるよう下腹部をマッサージしていた。

「先生！頑張って！」と自分も同じ便秘による排便に苦しんだ経験があるのか、一人の女子医学生が両手を握り締めて祈るように小さな声を出した。

やがて便の方がその重さに耐えかねて、ポッキリと根元から折れて落下すると、ステンレ

ス製の排泄物受けの底でコットンと乾いた音を立てた。

出口付近を扼していた先端部の最も硬い部分を漸く排泄したことにより、この出産も峠を越え、その後は比較的排泄が楽になったのか、見る見る太く長い褐色の大便を排出し始めた。

「おお！これは何と見事な一本糞だ！」見守る医学生が歓声を上げた。

肛門から繰り出された、太い茶色の大便はまるで蛇のように長く長く途切れる事無く尻穴からぶら下がり、やがて排泄物受けの底に達してとぐろを巻いた。

長年女性教授を苦しめた、宿便を全て排出すると言う苦行を終えて、全身に汗を浮かべてハアハアと肩で息を吐く。

「女は便秘がちと言うが、こんなに溜まっているとは思わなかったな。」と汚物受けの底に長々ととぐろを巻く排泄物を見つめながら一人の医学生が呆れたように言った。

「おや？また始めたぞ！」別の学生が目敏く見付けて声を上げた。

硬い便塊の排出が終わり、負荷の軽くなった大腸は本来の軽快な蠕動運動を取り戻し、腸内の汚物を全て排泄すべく三度目の痙攣を開始したのであった。

女性教授の肛門からは水分をたっぷり含んだ黄褐色の柔らかい便が後から後から押し出され、ステンレス容器の中にボトボトと落下して黄金色の山をうずたかく築いて行く。

最早排泄の苦しみは無くなり、次々と腸内から取り除かれて行く便により腸内圧力が低下して行く心地良い快美感さえ今は感じていた。

長い時間を掛けて三度目の排泄を終了した女性教授の顔には難手術を終えた後のような安堵感が広がっていた。

ロボットに肛門周りの後始末をされながら、半ば放心したような半ばうっとりとしたような顔を見せていた。

「しかし、随分溜まっていたものだな、あのほっそりした抜群のスタイルの中で、どこにあれだけ溜まっていたんだ？」、「前と比べると下腹当たりが随分ペチャンコになったから、多分あのふくよかな下腹に溜まっていたんだらう？」、「しかし、ここが手術室とガラスで隔離された見学席でよかったぜ。いくら美人から出た物とは言え、あの臭いは堪らんぜ！」と医学生が叫ぶと「いや、僕はあの臭いを嗅ぎたい！今すぐ手術室に行って神田先生の出した物に鼻を近くに寄せて嗅ぎたいくらいだ！」と先ほど美人教授の聖水を飲みたいと言っていた医学生が声を上げたので周りの学生はゲラゲラ笑い出した。

浣腸による強制排便を終えたロボット達は今度は洗腸の準備を始めた。洗腸の器具を持ち

込むと直径3cm近いポリエチレン製の筒状の物を女性教授の肛門に埋め込んだ。度重なる菊華への攻撃ですっかり柔軟になった尻穴はすんなりとこの筒具を受け入れた。筒具には大小2本の直径のポリエチレンチューブが取り付けられており、細いチューブはそのまま腸内に挿入されるよう内側に伸びていた。電動ポンプを使い細いチューブから微温湯を腸内に注送すると、腸内でオーバーフローした微温湯が太いチューブを通して排出されるようになっていた。

ポリエチレンチューブは透明のため排泄液の色を観察できる。最初の頃は体外に排出される液は黄褐色に染まっていたが、次第に色が薄くなり、微温湯の送入を続ける内に注入する微温湯と同じ無色透明になって来た。

その様子を確認してロボットは洗腸器のポンプを止め、器具を取り外し始めた。後には排出液受けの水槽に薄い黄褐色の排液が10リットルほど残った。

一人の医学生が、先ほど神田教授の尿を飲みたいと言った聖水男に向かって、「今度はあの水で体を洗いたいと言うんじゃないか？」とからかうように言うと、聖水男は真剣な顔をして大きく肯くのだった。

解説ロボットは再び内視鏡を女性教授の腸内に挿入したが、今度は何の抵抗も無く、大腸内へと進み始めた。大スクリーンには内視鏡から送られる腸内の様子が鮮明に映し出される。

「うん、ポリープも潰瘍も、その他なんら異常の認められない、実に健康な大腸だ。」と肛門科の学生が言った。

さて、上から下まで調べ尽くして次は何をやるのだろうか？と学生達は思った。

ロボット達は女性教授の裸体に、血圧計や心電図計のセンサーや血中酸素濃度計センサーなど色々なモニター装置を取り付け始めた。直腸温度を測るため、肛門には体温計が装入された。

それらから得られる医療データがスクリーンに映し出された。

解説ロボットが手術着のズボンを下ろすと、股間から巨大な棒状の物が飛び出した。美術のポーズ人形のような形をしたロボットにも関わらず、その部分だけは人間そっくりな形の筒具を付けているのを見て、女子医学生がイヤーンと小さな悲鳴を上げると目をそらした。

ロボットは剥き出しにした股間の器具に内視鏡用の小型カメラや照明を幾つか取り付け始めた。もう一台のロボットも同じように取り付け始めている。

仰向け状態の女性教授の左右に立つロボットが、その豊かな胸を揉み始め、肥大して黒ずんだ乳首を刺激し始めた。その瞬間血圧が一気に上昇しその後は逆に低くなった。心拍数と呼吸数は増加した。女性が感じるツボを敏感に感知して更に愛撫を激しくするロボットと男性経験豊富で快樂のツボを知る女体とが相まって、この異常な事態にも関わらず心は快感に溺れる方向に向かいつつあった。

「おい！先生が感じているぞ！」女性教授の股間がスクリーンに映し出され、膣口から透明な膣分泌液が流れ出している様子が映し出されていた。

更にロボットが揉み上げる乳房の先の乳頭が固く勃起始めていた。

大スクリーンはマルチ画面に切り替わっており、心電図などの医療情報と女性教授の胸元と股間と素顔を晒して苦悶と快感に歪む表情を同時に映し出していた。

股間の器具に小型カメラを装着したロボットが女性教授の股の間に立った。画面には女性教授の鮮やかなピンク色した女体のトンネルが大きく映し出された。トンネルは見る見る大きくなり、ふっと暗くなった。ついにトンネルの入口にカメラは突き当たり、幾つかの柔らかい襞を押し分けその内部に分け入った。トンネルの内部は少し広くなり天井と床には柔らかな絨毛がびっしりと植えられていた。そしてその最奥に佇む子宮口はまるで海底の軟体動物が飢えた口を開き餌の到来を待っているかのようなようであった。

ロボットが腰を前後すると上下の肉襞が、まるで消化液のようなネバネバした粘液を垂らしながら、捕らえた獲物を逃がさじと肉襞で巻き込むもうとする様子が画面に映し出されていた。

「正に女体の神秘だな・・・」これまで誰も目にすることの無かった、男と女の最奥部での互いの肉片を搦めて行われる秘儀を今スクリーン通して如実に見て感動の声が上がった。一方股間の器具にカメラを装着したもう一方のロボットは、女性教授の口をこじ開けると、口内に突き入れた。感応に煽られ朦朧とする意識の中で、これまでの男達とのセックスを通して教えられて、口を使った技術を無意識に発揮しだした。

カメラには南海の海底に住む軟体動物が妖しく体をくねらせるように、舌で巻き込んでカメラの装着された筒具を絡め取ろうとする様子が映し出された。

血圧計や心電図計など種々の医療情報を通して、女性教授の性感が上昇し興奮が高まっていることを示した。ロボットは股間を突き立てる前後運動を早めると共に、直腸内に装入された体温計のコードを摘み前後に動かして刺激した。

別のロボットが尿道に差し込まれたままになっている、カテーテルのクリップを外した。

カテーテルの先端からはロボットのピストン運動にあわせるかのように、リズムカルに黄色い液体を吐出していく。女性教授を取り囲み愛撫を加えたり前後運動を繰り返すロボット達の動きが一団と速くなった。

そして女性教授もそれに煽り立てられ、咽び泣くような声を上げて絶頂を極めた。

その時、カテーテルの先端からは夥しい液体が、まるで射精の瞬間の様に激しく噴出し、霧の様に広がって手術室内に美しい虹を描いた。

女子総合格闘技世界戦にて

古：皆さん、今日は、ここ日本武闘館では、これから始まる女子総合格闘技世界王座決定戦を前にして異様な盛り上がり状態であります。本日の実況中継は、私『口から先に生まれて来た男』古井達郎と、解説者として元ボクシング世界チャンピオン白田山則隆さんでお送りします。白田山さん、宜しくお願いします。

白：宜しくお願いします。

古：白田山さん、本日は不世出のチャンピオンと呼ばれ、これまでの3年半の間一度も敗北を喫したことの無い無敵のチャンピオン デビル・アフロディティ選手に日本の小桜小夜子選手が挑戦する訳ですが、勝算はいかがでしょう？

白：色々な人の間では、「今回の挑戦は無謀である。早すぎる。」と言う声を聞きますが、私は決してそうは思いません。確かにプロデビュー5戦目にしての世界挑戦は、非常に早いと言えますが、彼女の父親は柔道家世界チャンピオン、母は空手の女子世界チャンピオン、兄はムエタイのチャンピオンという、曾祖父の代から代々伝わる格闘家の家に生まれ、幼い頃から武術で鍛えられた彼女の体の中には格闘家としての本能が息づいています。プロデビュー以来無敗の圧倒的強さでここまで勝ち上がって来た訳ですが、試合を重ねる毎にその持って生まれた、格闘家としての潜在本能を徐々に目覚めさせ、試合を追う毎にその強さを増しています。ですから本日の小桜選手の格闘能力を前回の試合を基に計ってはいけませんよ。まだ若さと試合経験の少なさから多少荒削りの所も在りますが、経験を重ねる間に、随分試合運びにも慣れて来て巧さも増しています。そして若さゆえの疲れを知らないスタミナは、アフロディティ選手を上回るかも知れません。ですから本日の試合は、大いに期待して下さい。

古：小桜選手の脈々と流れる熱き血潮の中に潜む格闘家としての DNA が、本日デビル・アフロディティ選手との死闘を通じて、その眠れる本能を全て目覚めさせ、世界選手権奪取という満開の桜をこの武闘館のリングに咲かせるのでしょうか？それともデビル・アフロディティ選手の圧倒的な強さと経験に裏打ちされた試合運びが、桜の花を開花させる前の春の嵐を受けた桜の木の様に無残にも散らされてしまうのでしょうか？

オーッ！そう言っている間に、小桜選手のテーマである軽快な曲にあわせて、今青コーナーに向かう花道に小桜選手が現れました。小桜選手のトレードマークである桜の花片の刺繍をあしらった薄いピンク色の空手着と空手着の下に見え隠れするショッキングピンクの T シャツ、そしてお揃いのショッキングピンクのシューズ姿であります。

白：まだ 18 歳と若い小桜選手の紅潮した初々しい肌に良く映えるコスチュームですね！

古：花道を歩む小桜選手に割れんばかりの声援が寄せられております。これから始まる試合に期待を込めてファンのボルテージは鰻登りに上がっております。

そしてリング下まで来た時・・・一気にリングに駆け上り・・・そのままトップロープに飛び上がりました！ トップロープの上で大きく仁王立ち！胸を大きく反らし、両手を高々と上げてファンの声援に精一杯応えております。

白：二本の足だけでトップロープの上に立ち上がってファンの声援に応えられるのですから、大したバランス感覚ですね。

古：そして今！・・・オーッ！ 屈伸後方二回転半捻り！！トップロープの上から後ろ向きに身を翻すと、空中で 2 回転しながら鮮やかに半身を捻り、今マットに着地しました！そして満面の笑顔でリングの上を歩き回りながら手を振り上げてファンの声援に応えております。

白：あのパフォーマンスが出る時は、小桜選手が心身とも最高に乗っている時ですから、今日の試合は益々期待ができますね！

古：と！その時！会場の空気が震えるような低く不気味なテーマ曲にあわせて、赤コーナーの花道にデビル・アフロディティ選手の登場であります！

ウェーブの掛かった柔らかな長い金色の髪、透き通るような白い肌、くっきりとして形の良い高い鼻、エーゲ海のブルーを思わせる碧い瞳、まるでポッティチェリの画いた『ヴィーナス誕生』を彷彿とさせる美しい姿、真に美の女神ヴィーナス！そのヴィーナスのオリジナルはギリシャ神話に登場する美の女神アフロディティであります！

今リングに美の女神の降臨であります！

しかし！その美しい容姿とは裏腹に、その格闘スタイルは余りにも冷酷、残忍！どのような相手にも手加減することなく責め立てることから、名前の頭に悪魔！デビルの文字を刻んでおります！

白：それがアフロディティ選手のスタイルなんですね。アフロディティ選手は将来自分の位置を脅かしそうな有望若手選手を見付けると、残酷なまでに試合で徹底して痛めつけ、深層心理に回復不能の恐怖感を植え付け、二度と自分に刃向かわないようにして来た訳ですね。それがアフロディティ選手が長年王座に君臨して来られて理由なんです。

古：今回アフロディティ選手が小桜選手を挑戦者に指名したのも放っておけば自分を脅かす大きな存在になると確信しているからですね？

白：そう言う事ですね。

古：今日、小桜選手もこれまで挑戦した多くの選手達のように残酷に打ちのめされ、美の女神の前に生け贄として捧げられるのか？ それとも小桜選手の中に眠る格闘家としてのDNAが開花して、新チャンピオン誕生となるのか？いずれにしても目の離せない一戦であります！

今レフェリーのミスター・カタハシから両選手に試合前のルールの確認が行われております。

白：本日の試合は1ラウンド2分とか3分のラウンド制では無く、どちらかが完全にノックアウトするまでの無制限時間制です。これは自分にとって優勢な状況になった時にゴングに逃げられることを嫌ったアフロディティ選手からの申し出によるものです。

古：そうするとこのルールはアフロディティ選手にとって有利な訳ですか？

白：いやいや、そうとも言えません。ラウンド制ですとラウンド間に休憩出来ますが、体を休める時間が無いだけに若くてスタミナのある小桜選手にもチャンスはあります。

古：んーっ？！・・・会場の一郭が騒がしい？・・・おや？会場の隅からリングに向かう通路を何やら二人の選手が歩いて来ましたよ・・・頭には金のマスクと銀のマスク、腰から下は黒いタイツ姿。プロレスラーのようにマスクで人相を隠していますが、その正体は・・・隠しようもなくロボットです！ マスクを付けた2台のロボットがリングに向かって通路を進み・・・観衆が何事かと、あっけにとられている内に・・・今！リングに駆け上がりました！

レフェリーのミスター・カタハシも予想に無かった突然の事態に呆然としております。

デビル・アフロディティ選手がこの突然の闖入者をリングから追い出すべく、金色マスクのロボットを手で押しましたが、ロボットも負けずとアフロディティ選手に突き返しております。そして、小桜選手の方でも銀色マスクのロボットと小競り合いになっております！ミスター・カタハシはこの突然始まった乱闘に分け入ろうとしておりますが、收拾が付かなくなっております。この間にもアフロディティ選手と小桜選手が二人掛かりで、金色マスクを頭上高く差し上げて・・・今、カー杯マットに叩き付けました！

レフェリーのミスター・カタハシはこの事態を沈静化させようとしているのか？頭上で手をぐるぐる回しています・・・そして・・・この様子を見たリング下のタイムキーパーがゴングを打ち鳴らしました！兎にも角にも、試合開始であります！

白：どうもレフェリーのミスター・カタハシは試合開始のゴングを要請した様には見えませんがね？

古：ミスター・カタハシはリング下に向かって何やら違う！違う！と叫んでいるようですが、興奮した観衆の声に掻き消されて良く聞こえません！

この間にも、リングに叩き付けられてロボットがよろよろと立ち上がり・・・それを目掛ける様にアフロディティ選手と小桜選手が銀マスクのロボットの両手を両方から掴むと、思い切りスウィングを付けて・・・銀マスクを投げ飛ばしました！宙を飛んだロボットは、ふらふらと立ち上がろうとしたもう一台のロボットと正面衝突するとそのまま2台ともリング下まで転げ落ちてしまいました！

オーット！この転げ落ちた2台のロボットにレフェリーのミスター・カタハシも巻き込まれていたようです！後ろ向きでリング下の方に気を取られていたミスター・カタハシはロボットの接近に気付かず、もろに衝突の衝撃を受けてしまいました！

今二台のロボットはリング内に戻りましたが、ミスター・カタハシは起き上がれません！完全に気絶しているようであります！

この異常事態の中、二台のロボットと二人の美女がレフェリー抜きで試合を進めております！

古：しかし、両選手の動き非常に良いですね。ロボットが何か技を仕掛けようとしても、さらりと交わして、すぐさま反撃に移っております。そして・・・オーット！ツープラトンのハイキック！両選手の息の合ったハイキックが見事ロボットの顔面をヒットしました！しかし、白田山さん、小桜選手とアフロディティ選手 初めてタッグを組んだとは思えな

い見事に息の合った攻撃ですね！

白：優れた格闘家は相手の目の動きや体の僅かな動きから、次に相手がどのような攻撃を仕掛けてくるか予想が付くもので、それに対して自分も体勢を整えるものですが、この場合は相手の僅かな動きから相手の繰り出す技を予測して、自分も相手に合わせて技を同時に仕掛けるので、初めて組む相手でもこのような息の合った技が繰りだせる分けです。これも小桜選手やアフロディティ選手が一流の格闘家の証拠です！両選手流石です！

古：両選手の技がクリーンにヒットする度に、満員の観衆からは盛んに声援が飛んでおります！そしてロボットが何か仕掛けようとする時には、これまた盛んにブーイングが浴びせられております！

古：今、鮮やかにアフロディティ選手のドロップキックが決まりました！堪らず金マスクのロボットがよろけました！会場からは割れんばかりの喝采が上がっております！

白：しかし、ロボットは人間と間接構造が違うので間接技が使えない。また超合金の皮膚はパンチやキックを跳ね返してしまい・・・両選手、何かこう、攻めあぐねているように見えますね？

古：試合開始から早くも10分以上経過しますが、相変わらず両選手一方的にロボットを責め続けておりますが、何か動きが悪くなってきたような感じがしますが？

白：試合開始以来、休むこと無く体を動かし続けて来たので、両選手疲労が脚に来てますね・・・これはまずいですよ。何処かで体を休めるような体勢を作らないといけませんね！

古：ロボットは疲れることを知らないが、人間は体を動かし続ければ疲労を生ずる。そしてその筋肉の疲労は筋肉中に乳酸を生み出し、更に筋肉の動きを阻害します！

今、両選手は目の前のロボットと対峙すると共に、自身の体内から湧き上がる乳酸地獄とも戦っているのです！

白：両選手、全身にビッシヨリ汗を浮かべ、息も上がっているように見えますね。心配です！

古：そして全身に疲労感が充満し、メッキリ動きが落ちた両選手を励ますように、「頑張れ！頑張れ！ワッショイ！ワッショイ！」と熱い声援が場内から湧き起こっています！

古：オーツ！首投げ！首投げであります！ロボットの首投げが綺麗にアフロディティ選手に決まり、高い位置から投げられたアフロディティ選手が腰からマットに叩き付けられ、

大きく体が弾みました！アフロディティ選手痛そうに腰を擦っております。初めてロボットの大技が綺麗にヒットしました。

そして、こちらでは！体落とし！体落としです！柔道の大技が見事に小桜選手に決まりました！

そして、自分の得意とする柔道技で自分が投げられたことに血が上ったのか？すぐさま立ち上がりロボットに反撃を仕掛けましたが・・・オーット！これはいけません！不十分な姿勢でロボットに仕掛けたため、逆に鮮やかに巴投げを決められてしまいました！余りにも鮮やかに投げられたため、受け身を取ることも出来ず、背中からマットに叩き付けられました。

白：小桜選手いけませんね、ここで若さが出てしまいましたね。自ら墓穴を掘り、傷口を拵げてしまいました。試合巧者の選手なら、最初の体落としを決められた後、直ぐには立ち上がり、暫く体を休めてダメージの回復をはかると共に相手の出方を窺うものですが、自分の得意技で自分が投げられたことにより冷静さを失い、更なるダメージを受けることになってしまいましたね。

古：小桜選手、空手着を着ていては不利と思ったのか、トレードマークの薄ピンクの空手着をさっと脱ぎ捨てました！下にはショッキングピンクのTシャツ姿！

白：普段小桜選手は空手着に隠れていてボディーラインが見えませんが、こうして見ると実に良い体をしていますね。出るべき所は充分に出ていて、引っ込むべき所は充分に引っ込んでいる・・・、モデルをやっても勤まりそうな見事なボディーラインです！

古：両選手、先ほどまでは、一方的にロボットを攻め立てておりましたが、今は防戦に回る方が多くなっております。そしてピンチの両選手に会場からは「頑張れ！頑張れ！」とより一層強い声援が寄せられております！そして、ロボット達には更なるブーイングが浴びせかけられております！

古：オーット！これはジャーマンスープレックスと呼ばれるプロレス技か？アフロディティ選手の背後に回り、羽交い締めのように相手をフォールドしたロボットが思い切り体を反らせて、アフロディティ選手を後ろ向きに投げようとしています！これを食らったら、アフロディティ選手と言えど一溜まりも無い！最上点まで体を持ち上げられた時、アフロディティ選手が体を下向きに振って反動を付けて・・・オーット！これは畏でありました！アトミックドロップ！アトミックドロップ炸裂であります！ロボットはアフロディ

ティ選手が投げ飛ばされまいと、下に体を振るのを読んでいて、アフロディティ選手の下向きの運動加速度と最高点までに持ち上げた位置エネルギーとロボット渾身の力を込めて振り下ろした三重のエネルギーが今アフロディティ選手の尾てい骨に炸裂、ロボットの超合金の膝が大きくアフロディティ選手の尾てい骨にくい込みました。そして尾てい骨を襲った衝撃は超音速で脊髄を通過して脳天を直撃！いまアフロディティ選手は苦悶の表情を浮かべてマット上を転がっています！

アフロディティ選手ピンチ！大ピンチであります！この状況に会場からは悲鳴にも近い声援が飛んでおります！

古：そして、再びアフロディティ選手の背後に回ったロボットがアフロディティ選手のコスチュームを掴むと・・・

——ンッ??！ 今、会場内が一瞬静寂に包まれました！

背後から前に回したロボットの手がコスチュームを捲り上げ、一瞬ではありましたが、アフロディティ選手のチチが！いえ！アフロディティ選手の白い豊満な乳房が露出しました！

白：ローズピンクの可愛い乳首も一瞬見えませんでしたね！

古：慌ててロボットを振り払い、乳房をコスチュームに戻すアフロディティ選手！

そこに更に何か嫌らしい手付きでアフロディティ選手に迫るロボット！まるでイヤイヤをするように両手で胸を隠してリングを逃げ回るアフロディティ選手！

このように初々しい乙女の恥じらいの様な姿を見せるアフロディティ選手をかつて見たことがありません！

今や必死にアフロディティ選手のコスチュームを剥ぎ取ろうと迫るロボット！それに対して必死の抵抗を見せるアフロディティ選手！

一方、小桜選手も銀マスクにマットに倒され、寝技に持ち込まれたまま、羽交い締め姿勢から器用に脚を使ってT-シャツを捲り上げられようとしております。形の良いおへそが、今！目に飛びこんでまいりました！

オーッ！お聞き下さい！さっきまで両選手を必死に応援し、ロボットに盛んにブーイングを浴びせかけていた観衆が、今はロボット達に「頑張れ！頑張れ！」と声援を送っています！

脱がされまいと必死に抵抗する小桜選手！しかし既にT-シャツの裾は乳房の傍まで捲れ上がり、もう一方の脚を器用に搦めたロボットが脚を使い、小桜選手の空手着の半袴を引き下げております！そして、そこには！ピンクでは無く、初々しい白いパンティが徐々に

露出してまいりました！

古：方や、アフロディティ選手も今や上半身は裸！コスチュームの上半身は完全に捲り上げられ、顕わとなった大きな両乳房を両手で必死に隠し、体をくの字に折り曲げてリングの中を逃げ回っています！そしてその後を厭らしく追いかける金マスク！

アフロディティ選手に背後から追いついたロボットが今！下半身を覆っていたコスチュームを完全に引き下ろしました！

・・・なんと！コスチュームの下はTバック！金色のTバックであります！腹直筋がくっきり浮き出す筋肉質の体に、アマゾネスの女戦士が唯一身に纏っていたという禪姿を彷彿させるTバックを纏っておりました！

白：ほう！アフロディティ選手はリングコスチュームの下にTバックを履いていたのですか？

・・・試合の最中に食い込んで痛くないのかな？

古：脱ぎ下ろされて足に絡んだコスチュームに足を取られ、アフロディティ選手がマットに倒れ込みました！そこをすかさず、足を掴んだロボットが一気にTバックを剥ぎ取りました！

「ホーッ！」と見守る観衆から、ため息が漏れました！そこに出現したのは金色の濃密な繁み！かつて女戦士アマゾネスが君臨したという熱帯の密林を連想させる濃密な飾り毛が股間を覆っております！

一方、小桜選手も倒れこんだ姿勢のまま、ロボットに半袴と愛らしい純白のパンティを脱がされ、その下からは優しい春風にそよぐ霞草のように儂げな薄い春草が現れました！

今や両選手とも満場の武闘館の観衆の見守る中で一糸纏わぬ全裸姿となってしまいました！

ロボット達は全裸に剥いた獲物に向かいトドメの牙をたてるが如く今度は指技！巧みな指使いで全身を這い回っております。

白：見事な指使いですね！今まであんなに良く動く指先を見たことがありません。

古：既にロボットに全身をなで回され、乳房を揺すり立てられ、また乳首を揉まれ、股間の最も大事な箇所をまさぐられて20分近く経過しますが、両選手の表情には明らかな変化が生じております。さっきまで激しく抵抗していた力は全身からぐったりと抜け落ち、顔は紅潮し、半開きの唇からは浅く早く息を吐き、半開きの目は何か恨めしげに虚空を見つめております。

ロボット達の巧みな指使いにより、心は拒絶しようとしても、快感を求めようとする肉体の扉は既に開け放たれてしまったのでありましょうか？

白：小桜選手もロボットに責め立てられ上気して、名前の通り全身が綺麗な桜色に染まっておりますね。実にエロイ眺めですね！

古：今、アフロディティ選手を攻めていた金マスクがジャングルの様な飾り毛に覆われる股間をまさぐっていた右手を離すと高々と観衆に向けて差し上げました！

その右手の親指と人差し指を静かに開くと、その指の間には一筋の粘っこい糸が引かれております！アフロディティ選手、準備はOKか？

そして小桜選手の方もどうやら準備OKのようです。

二体のロボットはマットに横たわったままの両選手を見下ろすように立ち上がると、腰の黒いタイツを脱ぎ始めました。そして、そこに出現したのは！道祖神！古来日本人が豊穡の願いを込めて信仰したと言う道祖神と同じような形をしたモノを股間に隠し持っておりました！

白：しかし、大きなモノですね・・・恐らく経験豊富なアフロディティ選手は大丈夫としても、経験の無い小桜選手に入るのでしょうか？

古：オオット！見ている内に、小桜選手に対峙している銀マスクのロボットの股間のモノが少し縮小した様です！そして！アフロディティ選手に対峙する金マスクの方はより一層巨大に膨張しました！

白：これは見事なハンディキャップですね・・・私にもあんなモノがあったら、・・・羨ましいな・・・。

古：満場の観衆が固唾を呑んで見守る中、二体のロボットは無抵抗の美女達の足首を掴むと、大きく脚を押し広げ、股間のご神体の様なモノを岩戸をこじ開けて、ズブズブと埋め込んで行きます！

先ほどまでは固く閉ざされていたあまの岩戸も今や進入してくる男神のため柔らかく開け放ち、心では拒絶していてもその熟れた女体はその瞬間を待ち望んでいたのか？アフロディティ選手が顔面に半ば拒絶の表情半ば喜悦の表情を浮かべ半開きの口から言葉にならない呻き声の様なものを上げながら、まるで蛇が獲物を呑み込む時の様にジワジワと呑み込んで行きます。

方や小桜選手は額にびっしょり汗を浮かべ、眉間に深い皺を刻み、唇を固く結んで、その巨大なものが体内に侵入してくる痛みを耐えております。グイグイと腰を押ししてくるロボ

ットを押し退けようと藻掻いておりますが、最早その力は残されていないようであります！

白：実にエロい光景ですね！ポルノビデオでもこんな凄いのは無いでしょう！

古：今ロボット達は股間のモノを両選手の秘めたる場所に根元まで突き立て終えました！その内側から込み上げる魂を蕩かせる様な甘美な圧力に喰い絞める女神の祠が感じるのかビクビクと腰を震わせます。

そして、女性をもっとも女性で在る場所を深々と抉ったまま、ロボット達は腰を動かし始めました！それを喜悅の貌を浮かべて迎え入れる両選手！

ロボット達はその一点で一つに繋がったまま、無抵抗な美女達の手を取り、身体を抱きかかえて、次々と攻撃技を繰り出し始めました。

古：アフロディティ選手を攻める金マスクは茶臼という技か？　そして、解説の白田山さん、小桜選手に銀マスクが仕掛けている技は、確か・・・浮き橋という技ではないでしょうか？

白：さあ？私にはそっちの方はちょっと・・・

古：金マスクは茶臼から帆掛け船、帆掛け船から御所車、更には立ちかなえの大技・・・と多彩な技を連続して繰り出し、攻略をはかっております！一方銀マスクは、浮き橋から千鳥、更には仏壇返しと責め立てております！

しかし、先ほどからこのようなお下劣な実況を行っている、古井達郎とは一体何者なのでありましようか？しかし、それがどのようなものであろうと森羅万象目の前に現れたものは、無意識の内に言葉に化して、実況してしまうのが、アナウンサーの悲しき条件反射、完治不能の職業病であります。

白：今、銀マスクが小桜選手に仕掛けている技は知ってます。あれは松葉崩しと言う技ですね？

古：家ではよく奥様に仕掛けられるのですか？☺

白：・・・・・・・・・・・・・・・・！！Ⓣ

古：しかし、両選手とも一方的なロボットの攻撃を受けて既に30分近く経過します。このままの状態ですと第二ステージに進むのも時間の問題と思われまます。

既に両選手とも、全身びっしょり汗に塗れて、愉悦とも苦悶とも受け取れるような表情を

何度も浮かべております。

ただこの攻撃をまともに受け止めた状態で、崩壊をくい止めているのは、ライバルより先にイキたくないという、格闘選手ながらの闘争本能がギリギリの状態です。最後の一线を踏み留まらせているのではないのでしょうか？

この状況を目敏く見付けた観衆から「まだ早い！まだイクな！まだイクな！頑張れ！頑張れ！ワッショイ！ワッショイ！」と両選手に割れんばかりの声援が掛けられております。

そしてこの熱い応援に勇気づけられたのか、小桜選手は唇をぐっと噛み締め、アフロディティ選手は髪の毛を無我夢中に掻き上げ、必死の形相で耐えております。

古：いやー、解説の白田山さん、私は女子総合格闘技戦の総合とはこんなにも奥の深いものとは今まで知りませんでした。

白：古井さんもそう思いますか？実は私もそう思っていたところです・・・。

古：両選手とも時には白目を剥き、時には意味不明の言葉を口走り、朦朧とする意識の中で、ただ相手より先にイキたくないという真の武道家のみが持ち得る闘争本能だけでここまで戦って来ましたが、ついに崩壊を迎えるまで、後僅かに迫ったようです。

今！小桜選手が、まるで空気が抜けるような声を出してイキました！そしてそのまま崩おれる様にマットに沈みました！そして！それに僅かに遅れるようにアフロディティ選手も、こちらは獣じみた大きな叫び声を発して絶頂に達しました！イキました！

古：ぐったりとしてマットに横たわる両選手は、本来隠しておきたい両足の付け根も閉じ合わせることが出来ないほど疲労して、まるで観衆に奥の院を見せつけるかのように大きく開いたまま倒れています。本来の限界を遙かに超越した状態での絶頂であったため、その反動と疲労感は非常に大きく、正にグロッキー状態であります！

白：本当に奥の奥まで丸見えですね。それに長い間突き立てられていたため、ピンクの花びらもすっかり開き切ったままで、ピクピクと痙攣する中の様子も窺えます。

古：まるで巨大な洪水に襲われたダムが一撃で崩壊し、濁流に洗われた後に粉々に破壊された崩落の爪痕からチョロチョロと水が流れ続ける様に、今両選手の開け放たれたままとなっている、ほの暗い女性の源泉からは一筋の清水が、まるで激しかった崩壊の名残を留めるかのように滴り続けております！

古：オーツ！ここで、今までリング下で意識を失っていたレフェリーのミスター・カタハシが意識を取り戻したようです！

朦朧とする中で頭を振り振りリングに戻ります。

そして、リングに戻り、二人の女性選手が全裸でリング上にダウンしているのを見て唾然としております！

無理ありません、この状態はミスター・カタハシが意識を失っていた間に起きたことであり、ミスター・カタハシは何があったのか知るよしも有りません！

ここで、本来普通の人間なら倒れている人間を見付ければ、近寄って介抱するのが人としての努めですが、そこはレフェリーとして生まれ育った人間の悲しい性！倒れている人間を見ると、無条件に体は動き、無意識の内にカウントを数えてしまいます！兎に角カウントの開始です！

「ツー・・・スリー・・・フォー！」場内からもレフェリーのカウントに唱和してカウントを読み上げております！

シックス・・・セブン・・・、いまだ両選手意識を取り戻す気配が有りません！両選手動けません！このまま時間切れのノーコンテストに終わるのか？オーツ！今！今アフロディティ選手の体がピクリと動きました！どのようにダメージを受け、意識不明の状態であっても、カウントの声を聞けば体が条件反射を起こして起き上がろうとするのが、格闘家としての悲しい定めか？闘争心の残り火か？今！今アフロディティ選手が最後の1秒を残して、ふらつく足で立ち上がりました！小桜選手は立ち上がれません！今ゴングが打ち鳴らされます！勝者はアフロディティ選手！

激烈な戦いにも今終止符が打たれました。満場の観客からも惜しめない拍手と歓声が送られています。

古：全裸のまま、今レフェリーのミスター・カタハシに高々と右手を差し上げられております！かつて経験した事の無い、長い苦しい試合を戦い抜き勝利したアフロディティ選手、満面に笑みを浮かべております！嬉しそうであります！

オーツと！ここで二台のロボットが駆け寄ると、勝者のアフロディティ選手を祝福するかのように、前と後ろからハグ！

前の穴と後ろの穴をロボットに突き立てられ、右手をレフェリーに高々と掲げられたまま、アフロディティ選手は、正に美の女神のような微笑みを浮かべております！

古：それでは放送時間の終了となったようです・・・、いまだ興奮冷めやらぬ日本武闘館

から失礼をいたします。本日の解説は白田山 則隆さんでした。白田山さん有り難う御座いました。

白：有り難う御座いました。

首脳会談にて

A国大統領の夏の別邸に設けられた会談場では日-A 首脳会談が開かれていた。日本の首相は旗山 奈津樹であり、日本で第二代目の女性首相に就任して以来、その優れた政策能力により既に6年目の任期を迎えていた。大学生の頃にはミスT大に選ばれたこともあり、41才で首相に就任した時は、美しすぎる首相と言われたが、首相としての経験を積み重ねる間に、貫禄と威厳のようなものも出て来ていた（・・・口さがない連中は、単に中年太りで贅肉が増えただけだと言うが）。

一方A国の大統領は、最近のA国の低落に落胆した国民が、昔の強かったA国の時代のヒーローを彷彿とさせるイメージに引かれただけで大統領に選任されたような人物であり、政策能力は旗山首相より遙かに劣っていた。

はっきり言ってA国大統領は旗山首相が苦手であった。旗山首相は英語をはじめとして3カ国語を母国語のように流暢に操ることができ、通訳も通さず直接交渉に臨みながら、ズバリと議題の核心に切り込み、こちらが何の切り返しも出来ない内に、巧みな交渉力で日本側に有利に協定を結ばれてしまうことが度々であった。毎回の交渉の度に苦々しい思いを味わうばかりであったが、実力の差は明白であった。

A国の国民もこのイメージだけの大統領に失望し、今回の首脳会談で何らかのポイントを稼がなければ、大統領への再選はあり得ないというのが、大手マスコミの予想であった。いわば背水の陣で臨んだ会談であったが、やはり今回も序盤から旗山首相のペースで進んでいた。A国大統領はこの旗山首相の良く動く唇を苦々しく見つめながら、何とかこの口を閉じさせたいと思っていたが、如何ともしがたかった。

この会談の様子は全世界にテレビ中継されており、たまたま鳴海がチャンネルを切り替えた時にテレビ画面に現れた。

たじろぐA国大統領に向かい合うよう座り、優位な状況を更に優勢にすべく会談に神経を集中する間に、3体のロボットが旗山首相の背後に立った。

「あーあ、また出て来やがった・・・」と、僕はテレビに向かってウンザリとした声を上げてしまった。

いったいどうやって、厳重な警備を潜り抜けて、会談現場まで来たのかは知らないが、こいつらが現れれば、後は話は知っている・・・

案の定、A国大統領に意識が集中して、ロボットの出現に気が付かなかった、旗山首相は突然背後から3台のロボットに襲いかかられ、たちまち衣類を剥ぎ取られてしまった。

歳の割に良い体をしているな、とロボットに無理矢理服を剥がされながら抵抗する女性首相を見ながら僕は思った。ミスT大の頃はもっとスレンダーだったのかも知れないが、最近肉付きが良くなってきて、乳房にはボリュームが付き下腹にも柔らかな脂肪をたっぷり載せている。それらがロボットに抵抗する際にユサユサと柔らかく揺れ動く様は、妙にそそられる光景であった。

ショーツ？いやズロースを一枚残すだけに剥き上げたロボットは、どこで手に入れたのか、持ち込んだ麻縄を使って女性首相の両手を高手小手にキリキリと引き絞り、余った縄尻を前に回すと胸の上で二巻きした。更に縄を継ぎ足し両乳房の下に二巻き縛り上げ、両腕の動きを封じるよう縄止めした。そして三本目の縄で乳房を縊り出すように縛るとそのまま胸から下腹を通して背中に回し、腹の前で大きな菱形を作るように縛り上げてしまった。大きすぎる乳房の上下に厳しく麻縄を巻き付けられ、縊り出された豊かな乳房は、まるで大砲の砲弾のように、これ見よがしに大きく前に突出し、まるで男を挑発しているかのような感があった。柔らかな皮下脂肪に食い込むように胸から下腹にかけて菱形に縄がけされた荒くれた麻縄は、股間を通して背中の方に消えていた。ズロースの上からとは言え、振られた縄は容赦無く女性の丘にくい入り、股の付け根の間に荒々しく深く埋没してその姿を消していた。麻縄を大事な秘め所の上にくい込ませて身悶えする女の情動的なたたずまいに大統領はゴクリと生唾を飲み込んだ。

ロボットはまるで江戸時代のお白州に女囚を引き出したかのように、麻縄で縛り上げた女性首相をA国首相の前に跪かせた。

裸で身動き出来ないように縛り上げられた女が目の前に正座する様に、最初A国大統領は呆然としていたが、白い素肌に薄茶色の縄を厳しくくい込ませた、裸に剥かれた女が自分の前に据え物にされていると言う扇情的な光景に一気に血圧が上昇し、体内の血液が一カ所に集中した。

「オー！フジヤマ、ハラキリ、ゲイシャガール！　コンナ姿ヲ見セラレタラ、モウ我慢出

来マセーン！」と、慌ただしくズボンのチャックを下げると、血流が渦巻く肉塊を掴み出した。

この時、大統領の下半身は古き、強き、勇敢なA国のヒーローとなっていた。

「人の上に立つ大物というのは、やはり持ち物も大モノだな・・・」と鳴海が感心したように呟いた。

「あれを見せられたら、巨根と喧伝されるポルノ男優も泣きながら詫びるでしょうね。」と僕も相槌を打った。

大統領は、これまで自分を散々追い込んだ唇が目の前に在ることに気が付くと、両手で女性首相の髪を鷲づかみにして、その口に無理矢理に巨大なモノをねじ込んで、女の頭を大きく前後に揺さぶりながら、これまで自分に散々敵対して来た憎い口に復讐を果たした。大統領は今年で60歳を迎えるが、下半身は20代の若さを取り戻していた。そして若さゆえの暴走は止まる事を知らず、国境を分け入ったの宣戦布告無しの侵攻に対して、最早大統領命令を持ってしても制止することは不可能となっていた。

旗山首相は何とか抗議しようとしたが、顎が外れそうな程太くて、深く入れられた時には、口腔を通り越して気管まで塞ぎそうな程長いモノをねじ込まれ、声も上げる事が出来ず、口からは涎をだらだらと垂らし、目には涙を浮かべて、苦しそうなうめき声を上げるのがやっとならぬであった。

両手で髪を鷲づかみにして、力一杯頭を揺さぶり動かし、興奮と快感に漬る大統領により、脳震盪寸前まで頭を激しく振り回され、口内で暴れ回る大統領の分身により呼吸も満足に出来ない旗山首相は今にも意識を失いそうであった。

朦朧とする中で喉奥深くに大量のチーズクリームのようなものを撒き散らされたことを最後の記憶として、白目を剥き崩れるように前のめりに倒れ込んで意識を失った。

正座した姿のまま前のめりに倒れたため、量感のある豊かなヒップを高々と掲げたままの女性首相を満足げに眺めた大統領は背後に回ると、きつく股間を縛っていた縄を緩めて、これまで女性首相の最終防衛ラインを死守していた最後の楯であるズロースを一気に引き下ろした。

白い木綿の布切れを足から抜き取ると、勝者として結果を検分するかのように、両手でまだ暖かさの残る布を拵げ、核心部分と接していたあたりに顔を押し付け、その感触と匂いを堪能した。

暫くの間布切れに埋めていた顔を満足して放した時、大統領の鼻と口の横には黒い縮れ毛

が数本付着していた。そして大切な戦利品を自分のズボンの尻ポケットにねじ込んだ。女性首相のムッチリとした脂肪をたっぷりと載せた白い尻には、赤くゴムと縄の跡が残っていた。白と赤とそしてこんもりとした黒い森のコントラストを目にして欲情は最高潮に達した。

大統領は両手で尻たぶを押し広げて顔を近づけると占領地の検分を開始した。長年良く使い込まれて肥大した柔らかな花卉は、熟し切った果実のような香りを立てて、戦勝者の進駐に備えているかのようにであった。

最早全ての防衛力を喪失し、無条件降伏した占領地に対して、勝者の権利として影響力を行使するかのように、自身の体の一部である進駐部門に手を持ち添えると、狙いを一点に定めた。

股間を襲う異常な気配に驚き、意識を取り戻した旗山首相は喉に詰まった異物に咳き込みながらも大きな声で悲鳴を上げたが、大統領は構わずボリュームのある尻肉を押し分け、その柔らかな花肉に分身を押し進めた。巨大な肉棒が狭い肉洞を貫いて押し入ってくる苦痛に苦悶に顔を歪める旗山首相の顔がテレビ画面にアップになった・・・

「これは、一体どういう事になるのでしょうか？」僕は、A国大統領に激しく犯され続ける旗山首相のテレビ画面に釘付けになりながら、堪らず鳴海室長に聞いた。

「A国の大統領が日本の首相をバックから犯したんだ。これは間違いなく日-A戦争になるな・・・」

E n d